

嚴島圖會卷之二

本地堂

〔割註〕本社の後にあり。本尊十一面觀音。

毎年四月八日より一夏九旬の間、權供養の法會あり。これに依て夏堂とも稱す。正月元日供僧の修正會あり。また正月、五月、十月の十八日觀音講、十一月廿四日には天台大師講等あり。

御笠濱

〔割註〕鳥井の洲ともいふ。また本社あたりをすべていふともいへり。

御笠濱暮雪（八景の一）

浦なみのいろもひとつにふりつもる雪をみかさの濱のまさごち 從二位實岑

あかすとや神もみかさの濱松にあけぼの遠くつもる白雪 宜阿

白雪重々御笠濱。 平沙十里更清新。 寒月和光同玉塵。 菅原在廉

夜來最覺好風色。 寒月轉棹却迷津。 漁夫轉棹却迷津。 黃燦百泉

風糝飛花推笠濱。 雲林煙塢渾一色。 更訝波神撒玉塵。

玉御池

鏡池

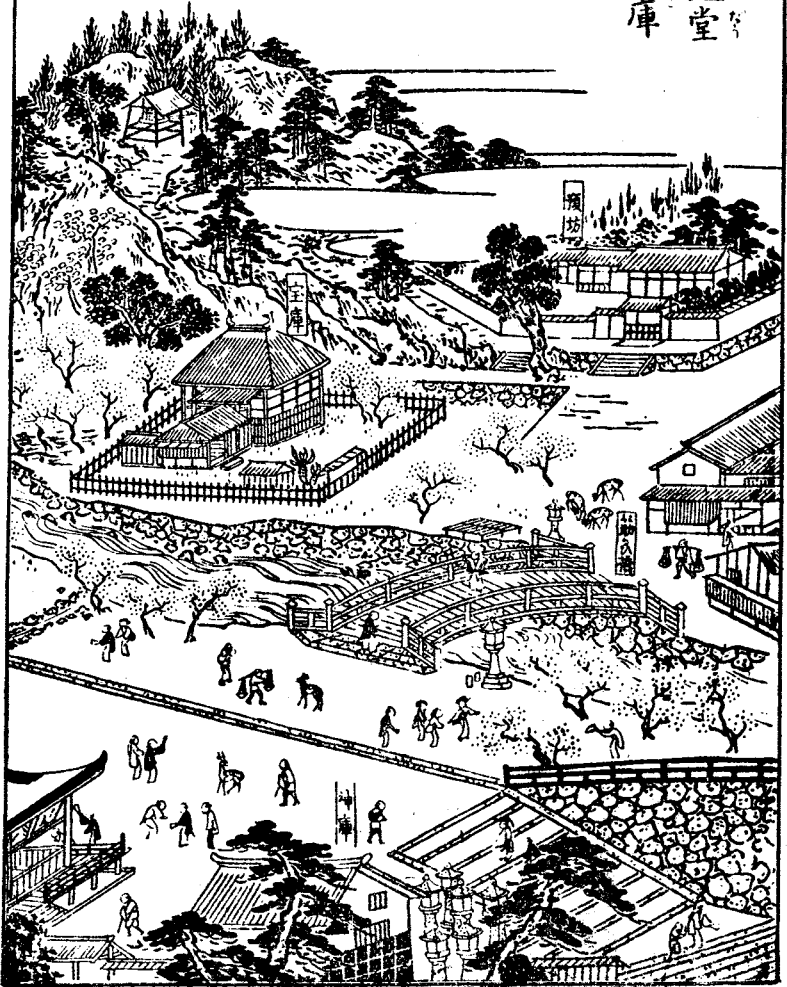
〔割註〕すべて大鳥居より神殿のあたりをいふ。玉は讚美の詞なりとぞ。

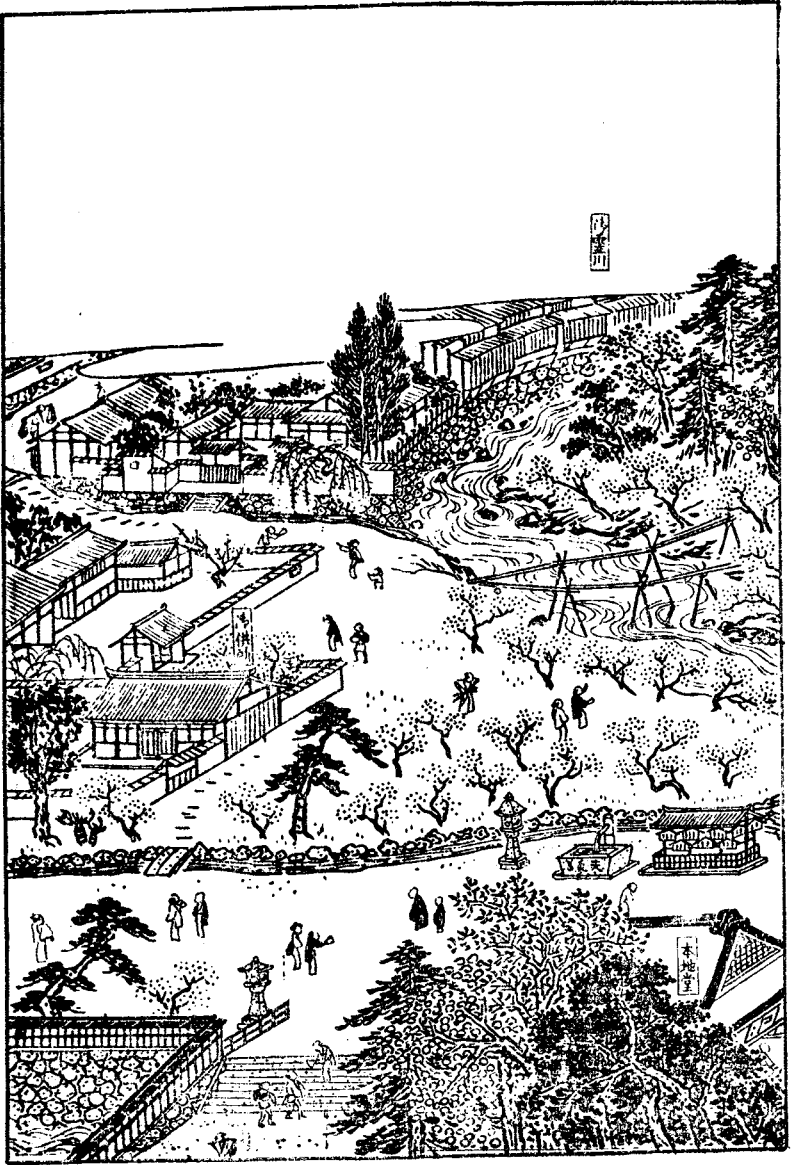
〔割註〕客神社の邊にあり。潮退て後くぼき處ありて、別に一小池をなすが如し。秋夜一輪の月光をすましむ。

鏡池秋月（八景の一）

鏡池秋月（八景の一）

本地堂
寶庫





御笠濱暮雪 みかさのりべのゆき



平安
孝文




鏡池 くわがうみ

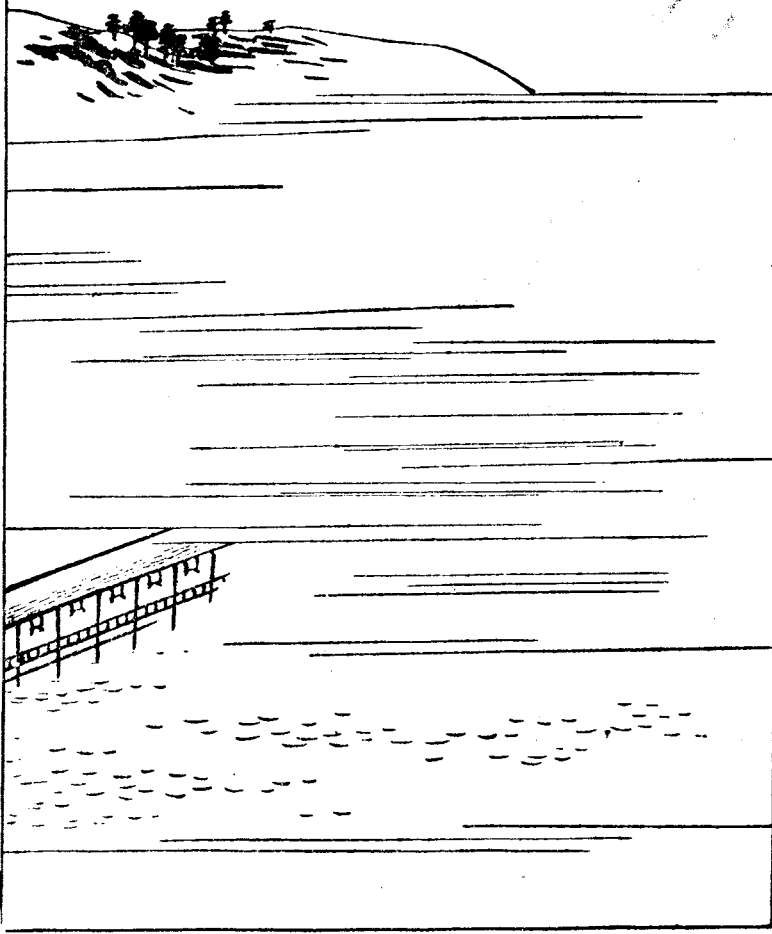
秋月 あきづき

大内 美隆

さびしく
の月よ

山也 やま

宮内 みやうち
か



神姬殿上月輪位
 百八回廊路欲迷
 吟翁不性踏珠起
 前導何時無鹿踏
 續吉坪



平安孝敬



ところから月もかぢみの池の名を見せてや秋のかけみがくらん、羽林雅季
みやしろにかくる光も曇なきかぢみの池にすめる月影 宣 阿

海門靈跡甲西洲。嚴島佳名千古悠。三位藤原宣通

多少行人富觀賞。瑤池明月鏡池秋。

一泓寒碧傍靈祠。淨似菱花可鑑眉。僧 獨 麟

最是清秋明月夜。其如漢帝影娥池。

清秋月滿鏡容池。古殿深沉夜色奇。僧 瞻 雲

假使蟾宮賦蹟去。分明照見玉娥姿。

海水通池鏡面開。秋光一碧絕煙埃。山本元貞

最憐靜夜姮娥月。臨照盈々移影來。

朝座屋清水

〔割註〕客神社の後瑞籬のうちにある。朝座屋に用ふる所にして猥りに汲むことをゆるさ

す。朝座屋は神人雜掌の所なり。この水清冷にして曾て難治の病を愈しむといふ。依てまたくすりの

水ともいへり。」

卒堵婆趾

〔割註〕大宮鐘樓の傍にあり。平判官康頼鬼界島よりながせし卒堵婆流寄しところなり。

今石の燈籠一區を建てその標とせり。圖につきて見るべし。或云、この石燈籠は、康頼歸京の後寄

附せしところなりともいへり。」

○源平盛衰記に曰、康頼入道は都のこひしさもさる事にて、特に七十有餘の母紫野といふ所に在け

るを思ひ出て、いとどせん方なくぞおもひける。流されしとき、かくと知せまほしかりけれども、聞たまひなば悶焦給はんことの痛はしく、悲しさにかくともいはずして下りたれば、存命て今迄もおはせばこの形状をつたへ聞て。いかばかりかは歎きたまはんなど、いひつゞけてたゞ泣より外のことなし。悲しさのあまりにかくぞおもひつゞける。

さつまがた沖の小島にわれありと親には吉よ八重のしほ風

おもひやれしはしとおもふ旅だにもなほ故郷はこひしき物を

千本の卒堵婆をつくり、頭には阿字の梵字を書き、おもてには二首の歌を染め、下に康頼法師とかきて文字をば彫つゝ誓ひけるは、歸命頂禮熊野三所權現若王子、分ては日吉山王々子眷族、物じて上は梵天帝釋、下には堅牢地祇、ことには内海外海の龍神八部、憐みを垂れたまひて、我かき流す言の葉かならず風の便、波の傳に日本の地につけたまひ、故郷におはする母に見せしめたまへといのりつゝ。西の風の吹ときは、八重の波にぞ浮めける。行に百行あり、國土を治むる謀、善に萬善あり、生死を出る勤なり。卒堵婆は萬善の隨一諸佛これを歡喜し、孝養は百行の最長龍天かならず哀愍す、漫々たる海上、汐路はるかの波のうへ、かならずとはおもはねど、せめては母のかなしさに、かくしてこそは祈けれ。思ふおもひも風となり、願ふねがひも答へつゝ、龍神納受を垂れたまひ、新宮の湊に卒堵婆一本寄たるを浦人これを見答て、熊野別當に奉りつれども、世を恐れけるにや披露はなし。安藝の嚴島にも一本着たりけり。折節康頼入道に縁ある僧判官西海の波にながされぬと聞ければ、何となく都をばあくがれ出て西國の方へ修行しけるが、便船あらばかのしまへもわたらばやとおもひけれど



康頼卒塔

婆の圖

卒塔婆は流れより

一と云へ本文も載たらず平家物語に

嚴島大明神の湯前のな記と足えた

るゆよもはこれありなるべし石燈籠一

基は跡の標と建たりその燈籠の面へ下

小載たらず然るも

鐘樓へ大内義隆

は寄附の鐘と云はる

その鐘下小載たりや

見ハ半塔婆の流とよ

り廿六の鐘樓に

ありしなふれ其取

とばりし知一人

りたれに而しつ



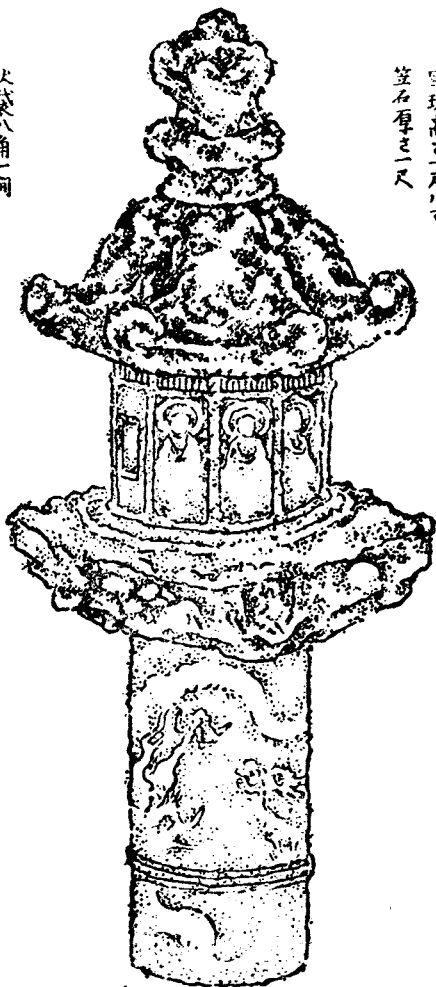
も、おぼろげにては船も人もかよはず、おのづから商人などの渡るも、僅かに日和を待得てこそ行ふな
ど申ければ、いかにも尋行くべきこゝちもせず有けれども、漸く安藝國までは下りにけり。嚴島明神に
參詣して兩三日ぞ有ける。抑當社の景氣を拜すれば、後は翠嶺山高くして、吹風効驗の高きことを示
し、前には巨海水深うして波瀾弘誓の深きことを表す。潮水社廊を浸すときは、紺瑠璃を瑞籬に敷か
つ疑はる。引汐神前を去るときは合浦の玉を庭上に蒔かたとあやしまる。和光同塵の利益は何れもと
りなりといへども、海畔の鱗に契を結び給ふらん。因縁誠に知がたし。參詣合掌の我までも八相成
道の結縁はたのもしくこそおもはれけれ。此明神をば平相國深く崇敬したまふ事ぞかしと思ひいづ
も恐ろし。幣とりあへぬ事なれば、只法施をぞ奉りける。心中に祈念申しけるは、歸命頂禮和光垂
跡の當社明神、硫黃島の流人康頼が生死知しめ給へ。なほも存命あらば夜の守、晝の守となり給て、
波の便を聞しめ、再び故郷の雲にかへしたまへと祈けるこそ哀なれ。終日念誦したりける。晚ほどに
神人神子御前の渚に遊覽す。月の出汐の満けるに、そこはかとなく波に流るゝ藻屑の中に、卒塔婆の
一本見え来る。怪しやいかなる事かとて取上見れば、二首の歌をかき、其下に康頼法師とぞ書付けた
る。各手々にこれを取渡した歌を詠じ哀なる事なり。作者何人やらんといひける中に、社僧のありける
がいとをし事かな。これはひととせ都より薩摩瀉硫黃がしまへ、三人の流人ありき。法勝寺の修行
俊寛、丹波少將成經、平判官康頼なり。この康頼法師が故郷もこひしく恩愛の親も悲しくて、かく
書てながせるにこそ。かゝる様はむかしもありとこそ聞け、是をば情なく捨てやおくべき。都の妻子
もさこそこひしかなしとおもふて、行末きかまほしかるらめ。これは如何して故郷へとどくべきとぞ

平判宮康頼寄附燈籠の圖

宝珠高三尺八寸

笠石厚二尺

地上より宝珠まで高さ八尺四寸量
石うつもれて見えぬ



火袋八角一間

五寸五分宛より廻り

四尺四寸長一尺四寸五分

火受六角一間一尺三寸宛より

廻り七尺八寸厚三寸五分

軸廻り四尺長三丈五尺
五寸

いひあひける。ゆかりの僧も見聞けり。心もきえ涙もこぼれてうれしくかなしかりける中にも、是は明神の御計にやと辱く貴くぞ思ひける。社僧この僧をかたらひ申けるやと修行者の御坊もし都へ上給はゞ、この卒堵婆の事つたへ申さん、慥かに平判官康頼が妻子のもとへ傳へたまひなんやといへば、僧こたへていはく、此事うけたまはるに、世にも衰れなる事にこそ、修行者のならひ宿さだまらぬ事なれども、もと都の者にて侍りしが、折節都へ歸のほり侍り、康頼がゆかりほのしりて候へば、たしかに傳へおくるべし。且は明神も御照覽あるべしとて件の卒堵婆を請とりて笈の肩に挟み、泣々都へのほりにけり。康頼は卒堵婆に詞をかき名を記し、文字をば彫刻み、それに墨を入たれば、汐にも波にもきえずして、鮮かにこそ見えたりけれ。

○平家物語曰、康頼入道はあまりに故郷のこひしきまゝに、せめてのはかりごとにや、千本の卒堵婆をつくり、年號月日家名實名二首の歌をぞかきつけゝる。(中略)是を浦にもつて出て南無歸命頂禮梵天帝釋四大天王堅牢地神王城の鎮守諸大明神、別しては熊野權現安藝のいつくしまの大明神、せめては一本なり共都へつたへてたべとて、おきつしらなみのよせてはかへす度毎に、卒堵婆を海へぞうかべける。そとばはつくり出すに隨ひて、海にいれければ日數つもれば卒堵婆のかずもつもりけり。その物思ふ心や便の風ともなりたりけん。また神明佛陀もやおくらせ給ひたりけん。千本の中に一本安藝のくにいつくしまの大明神の御前の渚にうちあげたり。こゝに康頼入道が由縁ありける僧の、もし然るべき便もあらば、かの島へわたりてそのゆくへをもたづねんとて、西國修行に出たりけるが、まづ嚴島へぞまゐりける。(中略)此僧いよ／＼尊く思ひ、靜かに法施まゐらせて居たりけるが、やうや

うひくれ月さしいでて汐のみち來るに、沖よりそこはかたなくゆられよりくる藻屑どもの中に、卒堵婆のかたちの見えけるを、何となうこれを取て見ければ、薩摩がた沖の小じまにわれありとかきながせる言のはなり。もじをばゑりいれ刻みつけたりければ、波にもあらはれずあざ／＼としてこそ見えたりけれ。(下略)

御手洗川

〔割註〕本地堂の前にありて源は紅葉谷なり。一に御靈川といふ。西行撰集抄に、東ののに清きながれあり。みたらひといふこあるはこれなるべし。昔は此水を神俣に用ひしかど、今は人家水に枕みて建ならべたれば穢をいみて用ひずとなり。』

手にむすぶみたらし川の月かけににこる心のちりも残らず

似 雲

花園

〔割註〕御手洗の流に傍ふて西廻廊の邊までをいふ。花の木おほし。』

黄櫻

〔割註〕同所反橋の傍にあり。うすもえぎ色なり。餘のさくらの散てのちはじめて花をひらく。』

寶庫

〔割註〕御手洗川の邊にあり。本殿の神庫にして、古代より奉納せし所の靈物を藏めたり。弓箭、

兜鍪、刀鎗、書畫、金玉、佛像、經卷、樂器の類ひ、庫中に充牧して一筆に擧げつくすべからず。別に寶物圖會に詳悉せり。其庫のつくりざま本をくみあげて壁として土を用ひず。いにしへ校倉といへ

るこれなり。古社古寺にはまれにあり。』

鐘樓

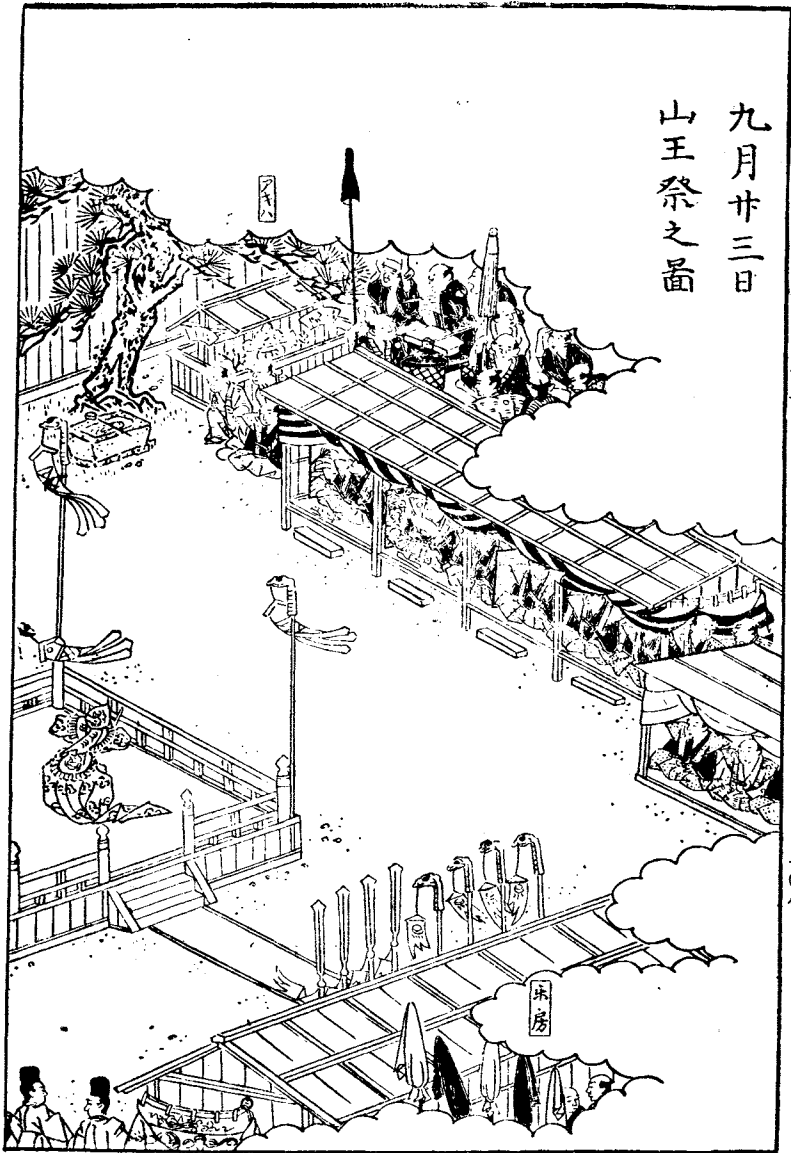
〔割註〕同所の山上にあり。社役相圖の鐘なり、また夏中は報更に用ふ。』

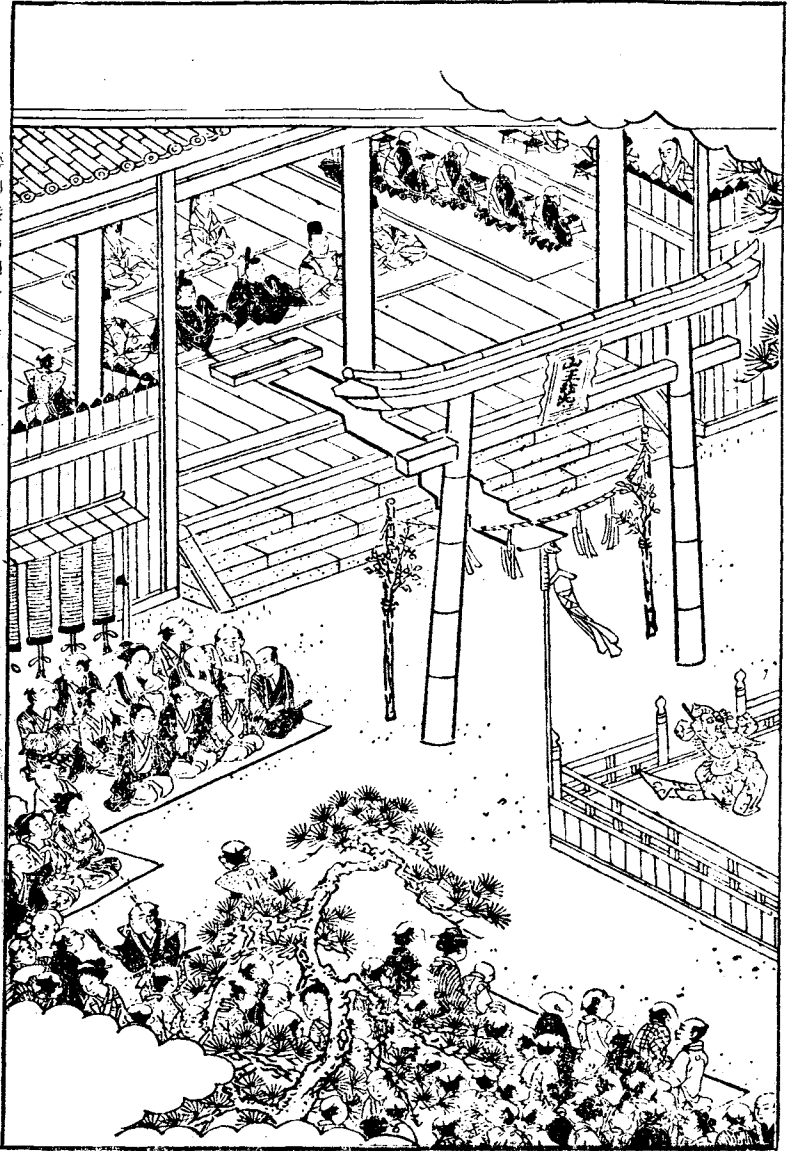
山王社

〔割註〕本社の東坂本にあり。拜殿鳥居あり。祭神三座〔割註〕中央は江州志賀郡坂本山王

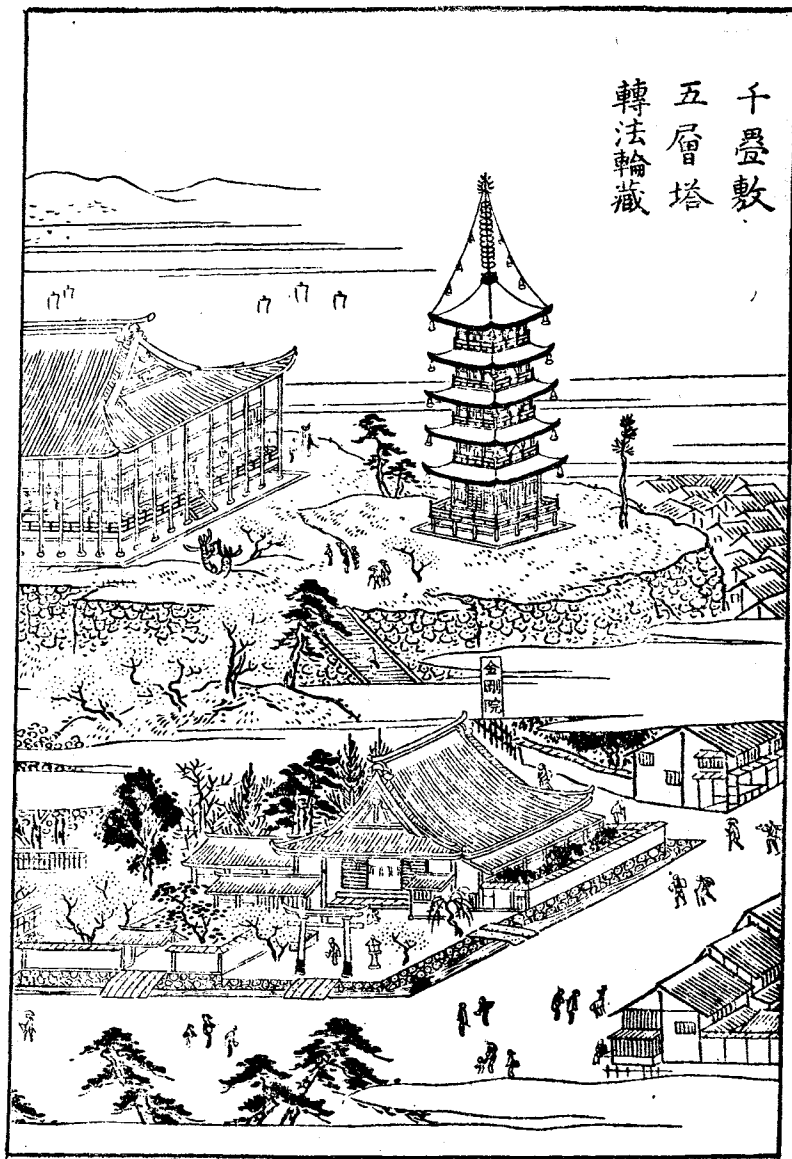
を勧請す。其餘二座は平相國清盛佐伯の祖神を祭るといふ。其證さだかならず。』

九月廿三日
山王祭之晝

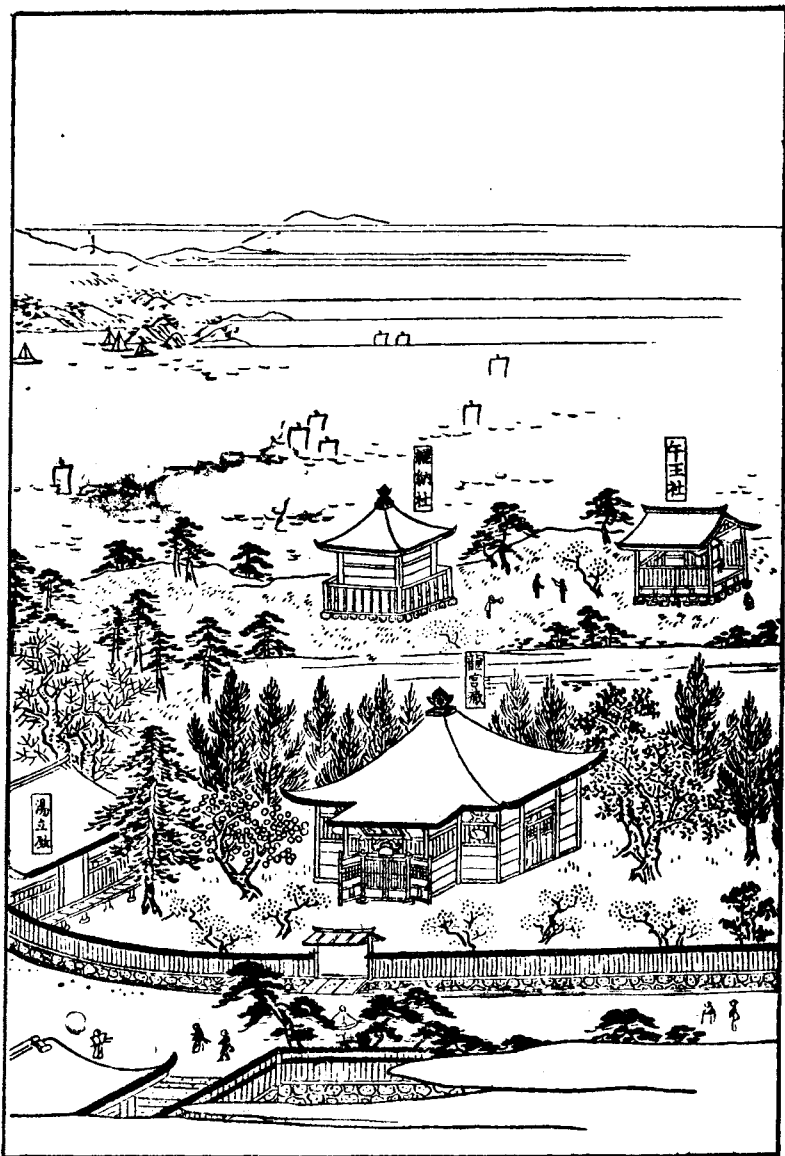


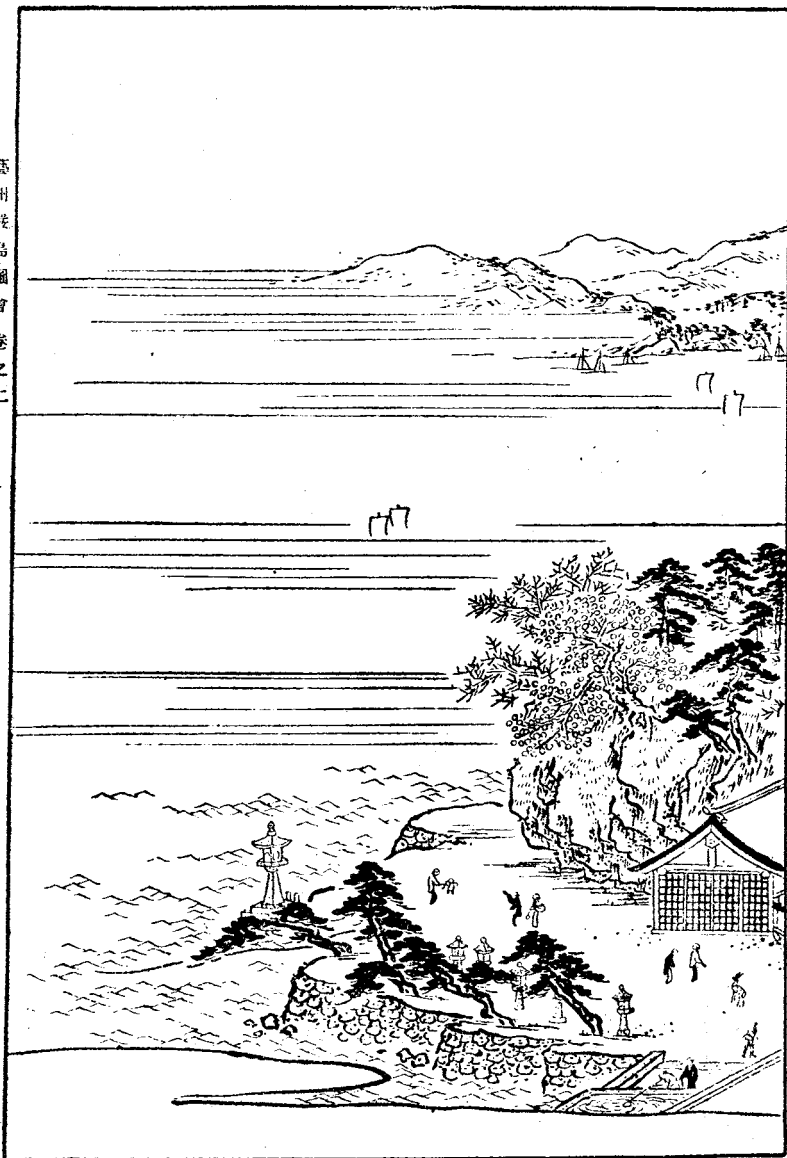


千疊敷
五層塔
轉法輪藏











しめたまひしは、
まこと除才と経堂創建の料に足したまへる、
是をもて彼木の大きなるもまた知べし。かくて経堂落成の

是ハ近年天台僧密成高麗截の破壊
せんとす、都建仁寺より其を補ひ
なり時白雀来り巢よの須洋あり今ハその
趣と画せりあり

嚴島輪藏經有闕密成法師

入京勉補其闕云有白爵之

祥見索予詩賦此塞責

曾觀嚴島貝葉闕魚蠹殘壞頗狼藉
就裡可惜高麗版散佚不存六百策
司書神鬼何其情愛字佛陀六蓋惜
一朝補足是誰力仙靈呈祥生白爵
鄭巢心豈不思功為裁一篇送省空
佗日相携遊嚴島玉篔生輝舊輪藏
唐僧省空補壞經事
見鄭巢送省空詩

頼杏坪



例祭二月酉日〔割註〕此日上卿祝師六家兩棚守出仕神舞あり。

荒胡子社〔割註〕山王社の北大經堂の麓にあり。瑞垣鳥居あり。永正年中に鑄たる鰐口ありて社にか

けたりしを、今は金剛院にをさめたり。

金剛院〔割註〕大願寺の子院にして、同社の本願なり。

五層塔〔割註〕大宮の右の方岡の上に建たり。方二間半、九輪までの高さ凡十丈。本尊釋迦如來。

脇土普賢文珠兩菩薩。應永十四年丁亥七月建立といへり。されども何某の所建にや詳ならず。天文

二年癸巳に至て年曆爰に二百二十餘年、殆ど頽壞におよぼんとせしに、人々是を敷きて再造せしかば

壯觀舊に復し、今に五層高く聳へ、遠望するときは宛然として鸞鳳の霞際に翔るに似たり。九輪再興

の時の銘露盤にあり。南のひらに天文二年癸巳三月十七日、上野前司藤原興藤、前掃部頭藤原廣就、

大願寺道本西のひらに大願寺沙彌衆慶祐尊、海宗歡儻阿、東の側に全宗五十貫井尻筑前井戸彈正又

左衛門治部、北のひらに鑄物師大工壹枝、同女房小工次郎三郎平子十二人とあり。中には磨滅して讀

がたき處もありて詳かにすること能はず。

大經堂〔割註〕桁二十間、梁十間五尺餘、椽幅八尺四方、欄干をつけたり。俗に千疊敷といふ。五層

塔の傍にあり。本尊釋迦如來(作詳かならず)脇土阿難迦葉(毘首羯摩が作)

傳へいふ。往古此地に椽樟の大樹ありけるが、圍抱幾ほどといふ事をしらす、其高さ枝葉の繁茂せる、

また詞におよぶべくもあらず、この故に天の日影を障へ翳して、朝には大野の地方を掩ひ、暮にはた

かく彌嶺を超えて能美なさびの島に影せり。然るに關白殿下秀吉公しらぬ火の筑紫へ御進發ありける

とき、御船をこの島によせたまひ、深く明神の冥助を御禱あつて御凱旋の折から此木を伐らせ、その跡に經堂を創建したまへり。是併願圓満の御驗とぞ聞えし。偕かの伐らせたまひし大木を以て作らしめたまひしは、いとも名高き安宅丸の御船なり。かく他材を交へずして全舟成就に及ぶのみか、なほその餘材を經堂創建の料に足したまへる、是をもて彼木の大きなもまた知べし。かくて經堂落成の日にいたりぬれば、一切經の誦讀ありて供養の式嚴重なりきとぞいひ傳へたる。「割註」因にいふ、かの安宅丸は希有の大船なりしことは、既に諸籍に著し。いま廣島の舷歌に、楠木一株をもて大船一艘をつくれるよしをうたふは、このゆゑなるべし。」

○經堂建立の時、安國寺惠瓊より大願寺へおくれる書翰。

當島一建立從關白様ニ被仰出候。爰許御見廻寶塔并に經堂御立候。一月に一度千部經之讀誦有之度由候。則壹萬石急度可有御渡之由御説に候。左候へば申談可相調。島中へも此由可被仰渡候。恐々謹言。

天正十五年三月十八日

安國寺惠瓊

大願寺

御同宿中

傳へいふ。大經堂の柱に塙圓右衛門直之のうたありしが、後年度々の經營に今は其柱かくれてなし。そは經堂建立のとき自ら題せしところなりとぞ。

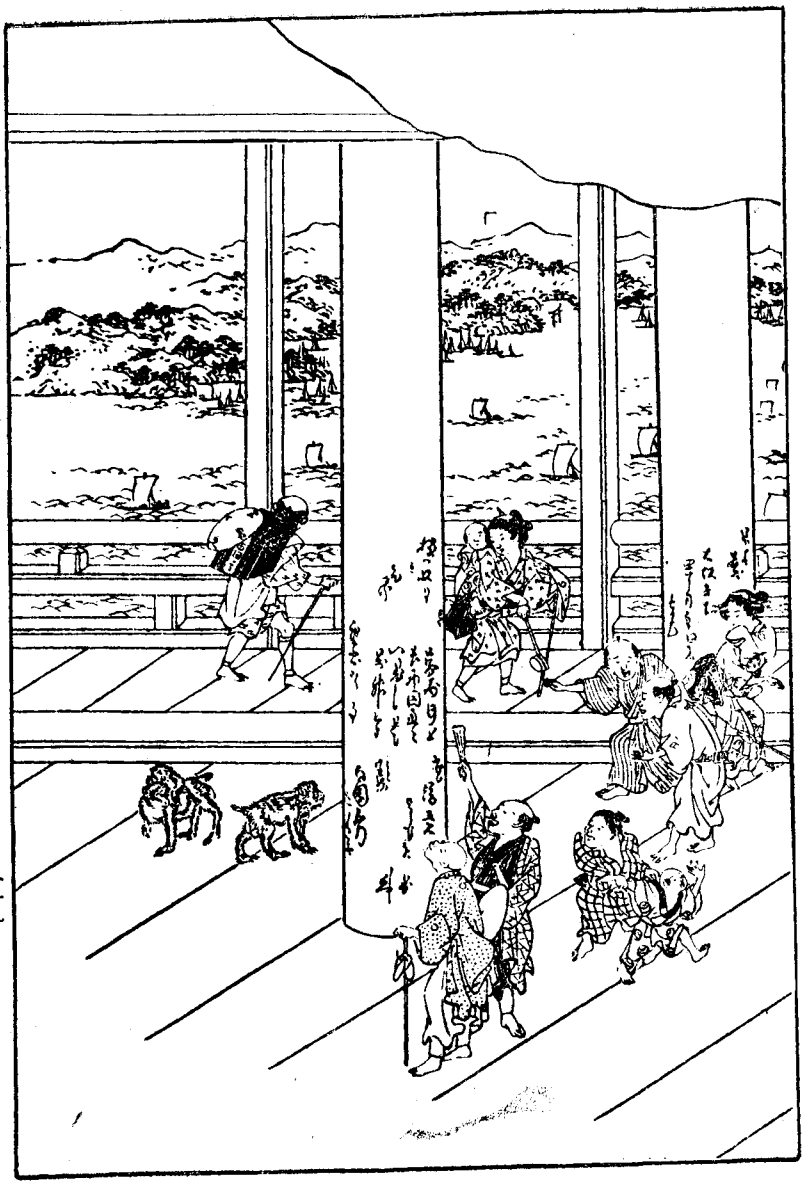
またこんと誰にもえこそいひおかじ心になふ命ならねば 直之

大經堂より眺
望の面

賴元禹

鷗歸空渚
在人去落
花深獨觀
雲出岫
與我共
無心





蘇州府城內
街市之盛
民物阜康
商賈雲集
舟楫往來
山色水光
無窮之趣
此其大略也

由來の堂大經





題ニ經堂柱ニ

石川 丈山

一島周廻唯七里。層峯蒼鬱勢嶢然。衆人浴澡長濱水。

群女徘徊小浦邊。塔傍山堂高聳漢。寺棲林壑薄籠烟。

飛樓湧殿連三江曲。無數神燈照客船。

納經堂

〔割註〕大經堂の傍にあり。萬部諷經のとき用ふる處なり。〕

香櫻

〔割註〕同岸上にあり。彌生の頃は清香馥郁として尋常のものにあらず。〕

轉法輪藏

〔割註〕大經堂の麓にあり。二丈五尺四方の輪藏にして一切經ををさめたり。中央に釋迦佛

大士普成、普建の二童子を安置せり。〕

龍宮界藏

〔割註〕輪藏に同じ。額は根目休の筆。〕

二所の輪藏は、天文五年大願寺道本上人、往昔この島に納むるところの一切經、はやくも虫鼠に毀傷せられ、殘編全からざることをかなしみて、憤然として是を異域に求むるの志あり。されども其身終にいたることを果さず。因て大内義隆に請ひ、内僧尊海をして義隆の書を齎らし、これを朝鮮に求めしむるに、彼土も衰亂既に久しく、佛乘散失して其遺帙にさだかならざりしかば、徒に手を空しくして歸朝せり。然るて天文十一年長門國普光王寺にもとより納めたりしを、義隆經藏とも引て寄附せられき。今の轉法輪これなり。(一に高麗藏といふ)たゞ龍宮藏のみは、何年また誰人の所建にや詳ならず。里老の口傳には龍宮藏をふるしとすれば、かの虫鼠に毀傷せらるといへるは、この龍宮藏の事にやとおもはる。今をさまれる經卷一は宋板、一は朝鮮板なり。

○尊海渡海の時、大内義隆疏勘合の寫せんかいとかいとき。

大日本國臣左京兆尹兼都督長史武衛次將多々良朝臣義隆。奉書朝鮮國禮曹參足下共聞。殿下德兼三代、惠懷萬方。君道有仁臣道有忠。國富化旺。文官以才武官以勇。境靜民安。王政之盛莫過於今。聖治之興。何愧于古。抑去天文三年之春。纘船以不腆之土宜矣。彼船及于今不歸國也。只怪着岸上陸而獻方物否。却波瀾洋海之風波否。日待回報耳。越又吾本邦之内。有州曰安藝。有社安辨才。多門兩天爲社主。而年代深遠也。夫大藏經。載之道之器。而含萬理矣。運轉之則全覆燾。繞旋之則保國家。安泰加之。古人以孔子比釋子。以十哲弟子比十大弟子。然則儒釋一致。不可外焉。吾日域之神社佛宇。無大無小。以安置此經爲善道也。當社亦雖寄置之。或有蠹虫破費或有雀鼠侵耗。有蒸潤者。有殘斷。壹函亦不敢全。仍不克補宗粘綴者年既久矣。仰冀殿下頒賜大藏金文壹藏付回使載歸。則以爲億兆無疆之賜。專祝聖壽萬歲。更祈社稷千載。聊獻菲薄之方物。具于別幅。天覽電矚萬幸。伏乞采納。溫風發榮。君時珍重。不宣。

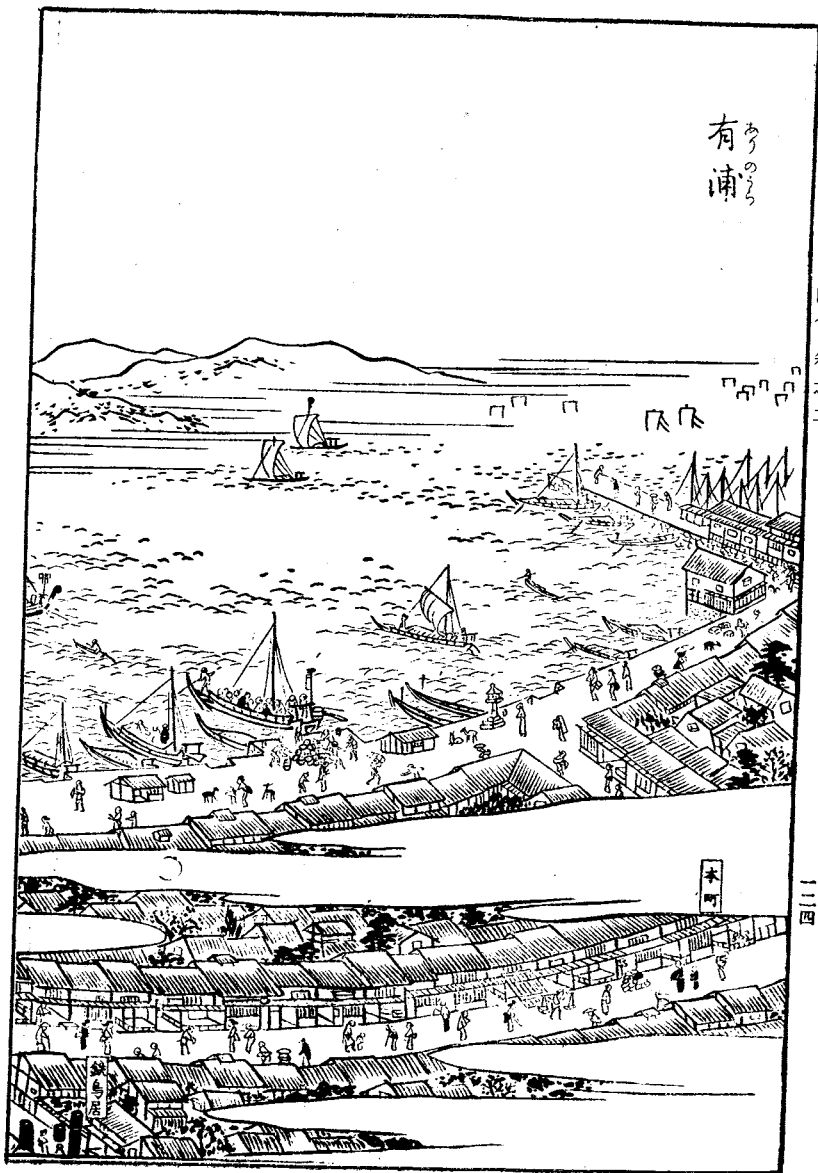
天文五年二月

大内多々良義隆

同返翰

朝鮮國曹判姜顯奉復日本國王臣左京兆兼都督長史武衛次將多々良朝臣義隆足下。承辱書憑。審多福。不勝欣慰。所獻禮物啓了。土宜白細綿捌匹。白苧布捌匹。黑細麻布捌匹。虎皮一張。豹皮一張。白人參二斤。清蜜三斤。付回使准領留。前索五經正義及兩寺新額。即付回使。未

有浦
あうのうら



嚴島の隱寮

みま家をむら

へて

怒作

ままかくれ

まつの

戸わを

もつとみ

て

ま家く

あとを

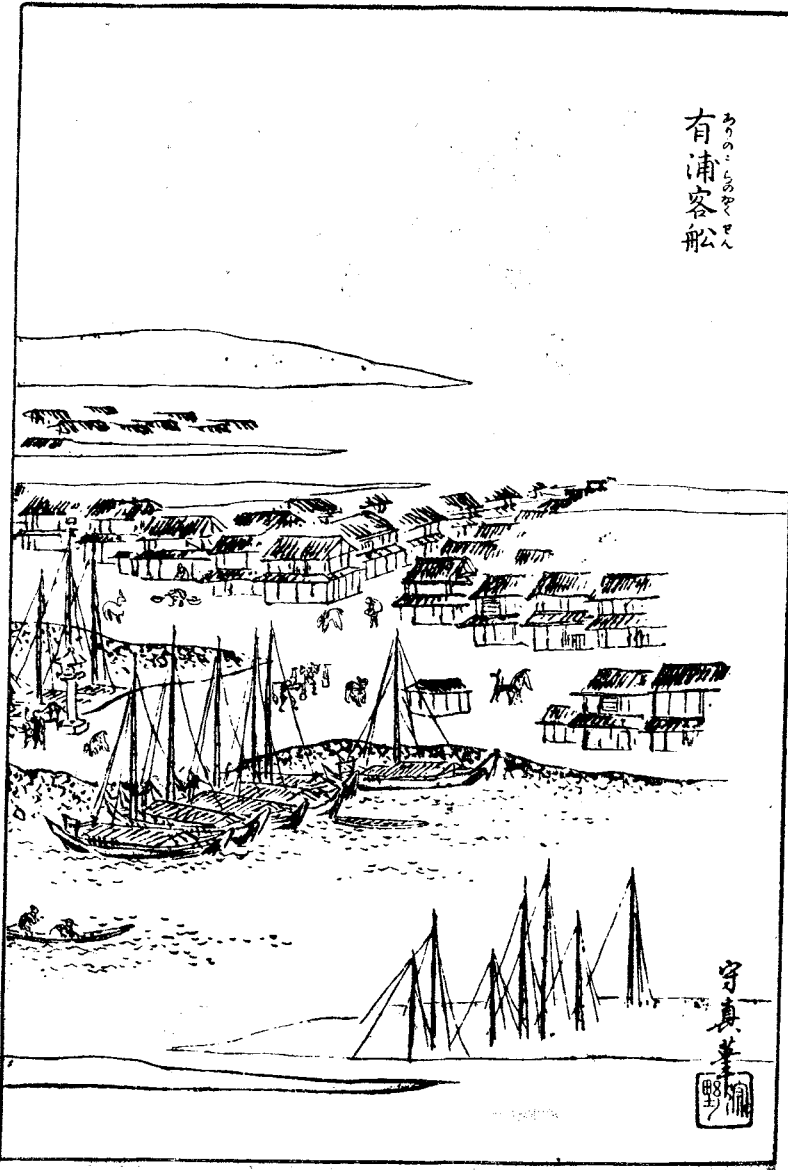
ちりの

浦た



塔の園

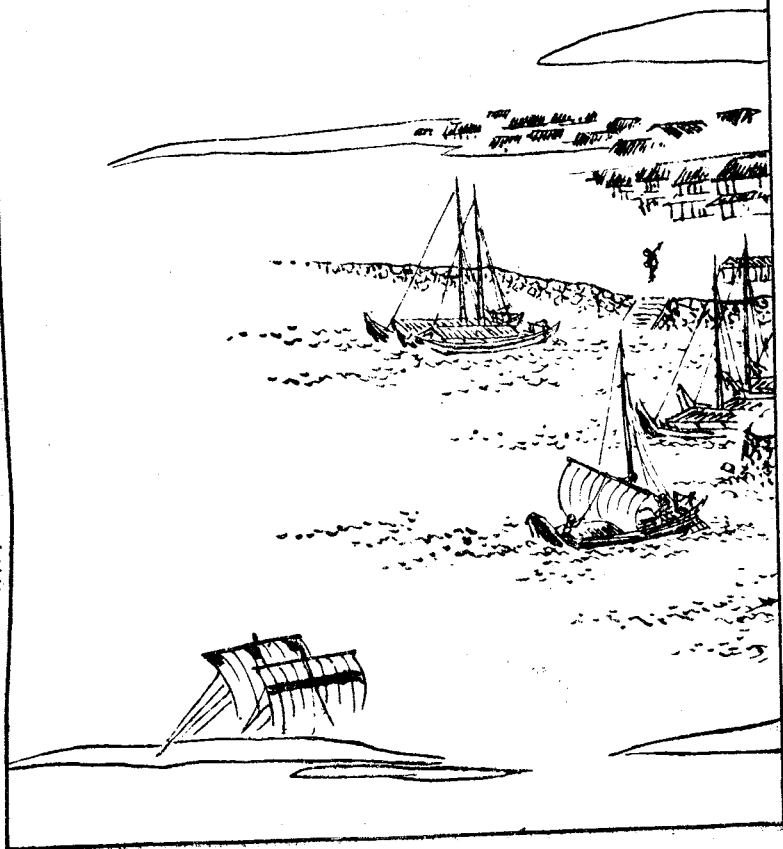
ありのころのやぐせん
有浦客船



守真筆
印

岡田清

月のあけ
りる夜
法庵一りま
まうて
よあ
つふーま
よあら
ちの
月うけ
法庵の境
ち
えーか



レ知何緣中滯。想今已達矣。茲者復承求大藏經。來使體雅。意求之殷懇。豈不レ欲勉副雅意。但前代高麗之時。所レ印經藏。復因衰季喪亂。幾盡已散。以及本朝。深山古刹。有遺貯。累將件帙。奉塞貴邦之請。近緣國家專尙周孔。不崇釋教。時好不存。遺失不復收。年代浸遠。無留餘勢。轉啓良乖。好之義。徒懷愧恨。惟希恕諒。餘冀雅攝無愆。不宣。

嘉靖十八年九月

禮曹參判姜顯

牛王社

〔割註〕大經堂の麓にあり。猿田彦大神を祭れり。

奉行屋敷

〔割註〕同所にあり。すなはちいにしへの政所屋敷と稱せる是なり。

元占役所

〔割註〕同所にあり。

鐵鳥居

〔割註〕同所にあり。今柱のみ残り。長寛年中の建立といひ、また一説に足利氏の所建功を終へずしておきぬといへり。何れか其證を得ず。

脇浦

〔割註〕國府上卿田所氏いつも此岸に船をかくる例なる故に、一に上卿鴈木といへり。島巡の時も

こゝより乗船す。

有浦

〔割註〕平家物語には蟻浦と作り。訓同じきゆゑかよはし用ひたるのみ。惣名は東町にして數町

にわかれたり。所謂岡町、幸町、中間町、中の町、魚屋町、北の町、後町、西蓮町、同奥町、新町、

濱の町、小浦等なり。

一島の要津にして買船つねに來往し、櫓聲咿軋として朝暮間斷なし。昔はこの地、洲濱にして入江ありしが、今は市街連綿としてその佛だにも見えず。

高倉帝御幸記曰、三月廿八日還幸の御船たてまつる。内侍ども汀にいでて、なにとなく日頃の名残

しのびおもひたるけしきなり。なごりおほきよしのうたつかうまつれとありしかば、

たちかへるなごりも有の浦なれば神もめぐみをかくるしら波

風もしづかに物のあはれも春ふかくなりける。おもひかけぬしまのうへに、さくらのちりがた
になりたる見ゆ。いみじくをかしくおぼえて三月盡になりけり。云々。

足利將軍義植公、西國下向のとき、

わがたのむ神の恵みの有の浦ありし昔にかへれしら波

尋ね來て神にいのりはありのうら深きめぐみを思ふばかりぞ

有浦客船（八景の一）

つなぎよるたよりやありの浦浪にとまり定むる船ぞかすそふ

過がてに沖こぐ船のより來るは神にねがひや有のうら波

けふいくかつなでもとかすこのしまにあかぬ見るめや有の浦浪

激澗波光有浦前。石磯一望水連天。

無朝無暮。問津帖。去々來々幾客船。

群帆落日向千山。繫纜翠巖碧石灣。

借問東西南北客。夢魂應不至人間。

古岸候風買客船。吳哥巴曲度鷗州。

義植公

聖護院良恕法親王

參議公長

宣阿

似雲

民部卿藤原爲經

僧獨麟

僧獨麟

僧獨麟

僧瞻雲

僧瞻雲

六月市立の屆

六月の十日より七月の七日までを夏
 市といふ夏市の春市燠市小對
 せる号なり春市ハ三月十日より
 四月八日小訖り燠市ハ九月十日

より世日小訖ることを
 年中の三市といふ然き
 ども春燠の二市ハ夏市
 の比小あつどもその繁花
 雜爾譬々ある小物なたハ
 夏市ちりりり府
 城廣島ハ更にも
 いふ次迎国の商賈
 肆をこゝに移して諸
 色をあねなへ殊々十



七夜宵は講の前はを
 盛と次まをま買買の
 子のまあま或
 ハ舞妓或ハ
 弄丸或ハ揚弓
 或ハ擲補鼻高
 假面の佳優ハ若
 戸の故子をや習
 ふらん登たこ
 龍脈ハ茅の
 輪の仲種や字
 ぶらん時時祭
 礼小子をよせ
 こ各の利を管むも
 こを昇平の代の駿
 なまこ

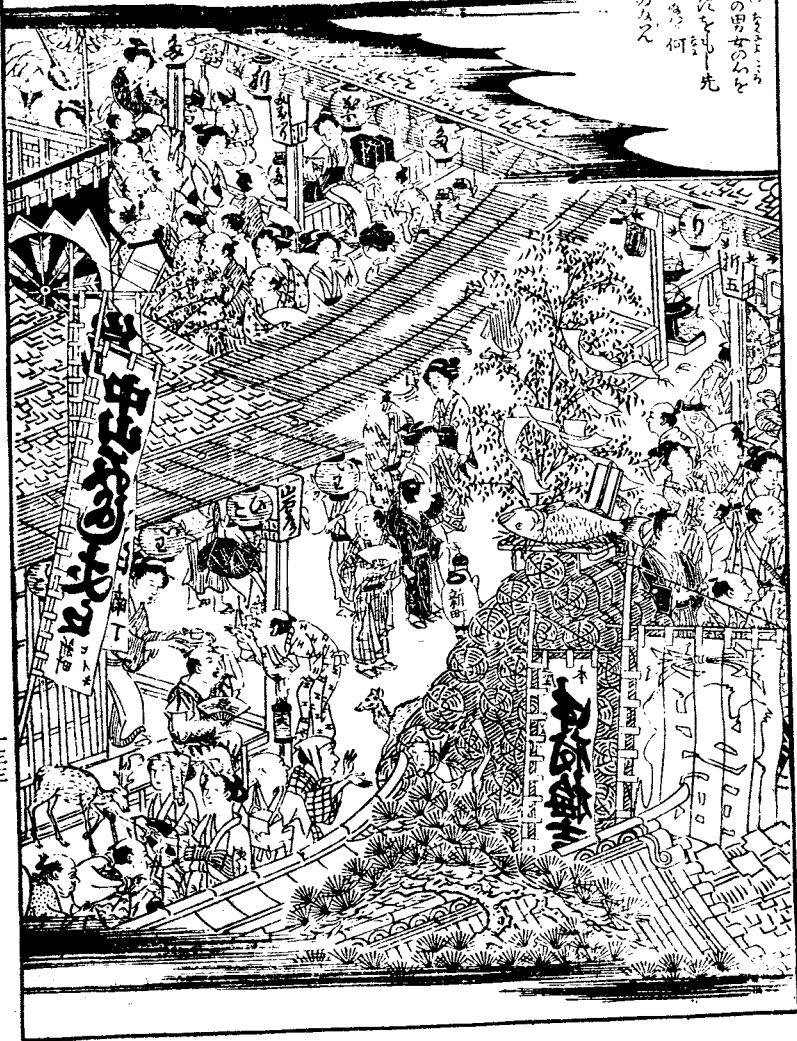


歌舞伎芝居の面

毎歳の三度の市は、歌舞伎の各々あまき来り大宮の東の舞臺を於て、勳進貞行、京都の顔もせ、浪花の二三の音もをさく、かきめ、俵ひて、西海等々の劇場なること世々々々、さる所なり、そもくこの寺、舞伎といふ、慶長のころか、かま出その久保といふ、女よ、かたは、は、一、文、僧衣、を、着、ぬ、を、も、佛、ち、を、目、へ、金、辨、れ、といひ、か、後、男、の、美、成、一、刀、と、枝、へ、髪、を、お、り、歌、舞、じ、う、ハ、舞、伎、と、名、つ、け、り、と、ぞ、古、時、の、寺、舞、の、ま、を、古、画、に、あ、い、て、入、り、お、ち、す、曾、け、の、ま、が、い、ち、り、然、る、を、い、も、憶、當、井、生、か、胡、琴、の、天、舞、舞、ま、い、して、風、俗、の、禪、摩、と、な、げ、玉、り、た、あ、れ、今、世、の、巧、も、小、巧、も、如、入、能、小、能、と、ま、へ



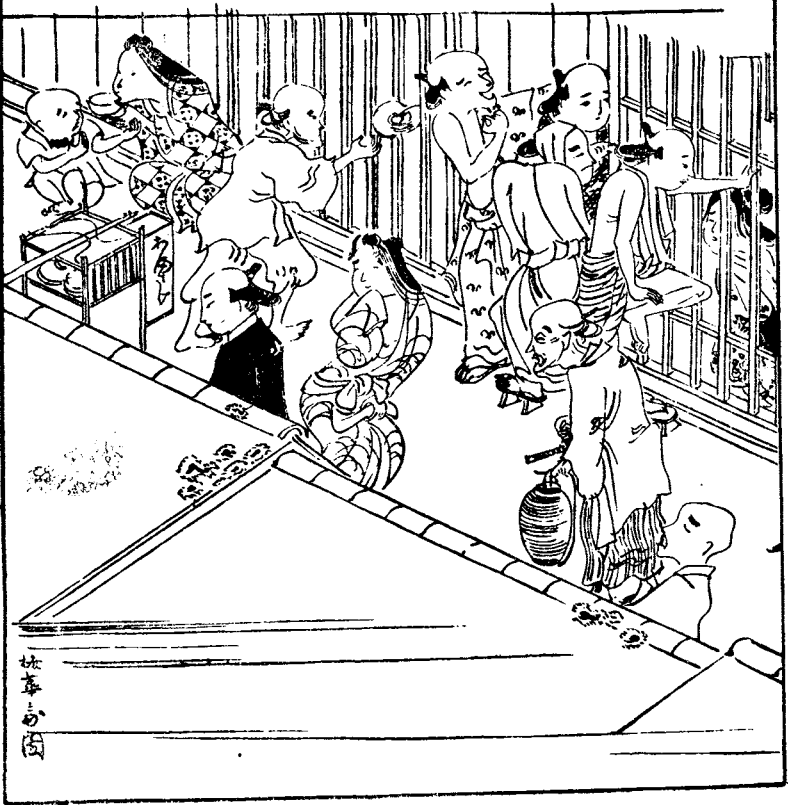
くんしん ちやうとん
群衆の男女の心を
蕩かすを、先
生兄を、何
とつのみえ



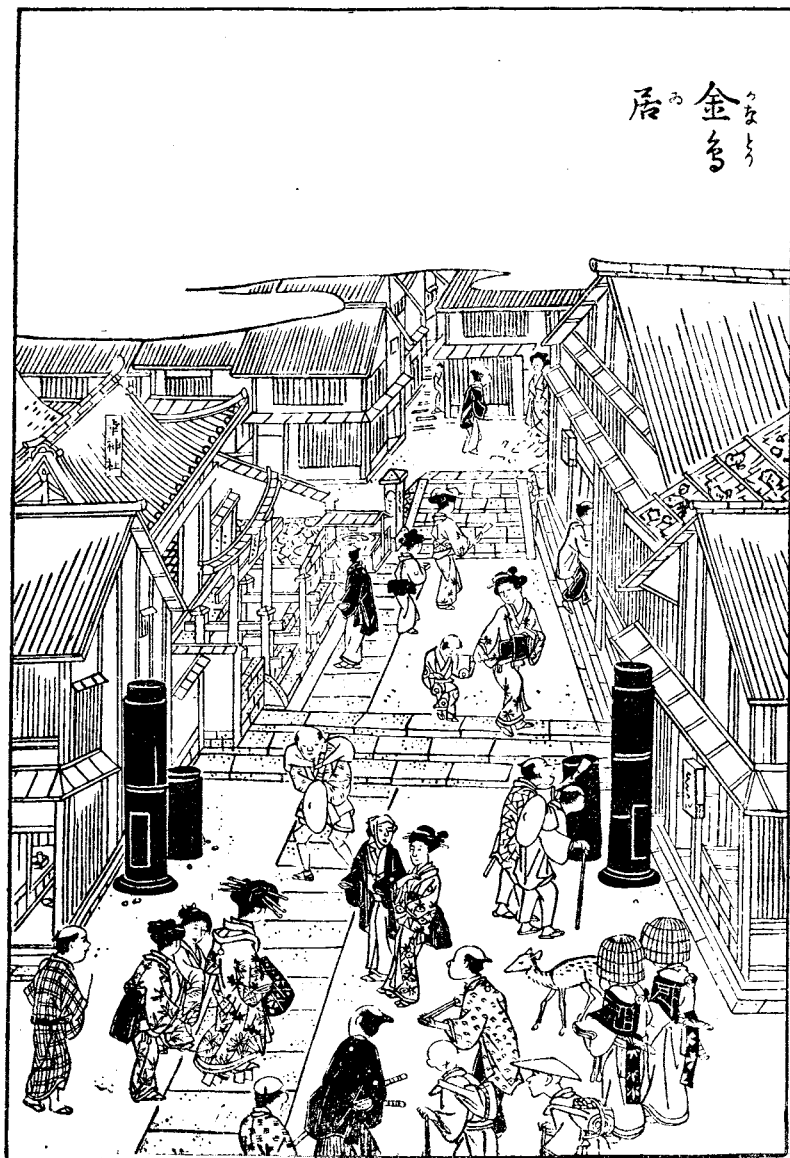
金吾居辻君の圖

かきこゝわつりさぶづ
 ゐらうたまや名はたち
 きみみのまつらひびと
 ねあぐはよはもつりや
 祭と職人並歌合
 よ先りもを枝もよ
 浦この波のよを枝も
 知りも繋ぐぬ舟のう
 知るこもふて汐風
 顔と晒し雲路お
 に袖を濡してあだ
 ちるもの先を舟をや
 つとけらるるれあひ
 袖あがり





金居かない

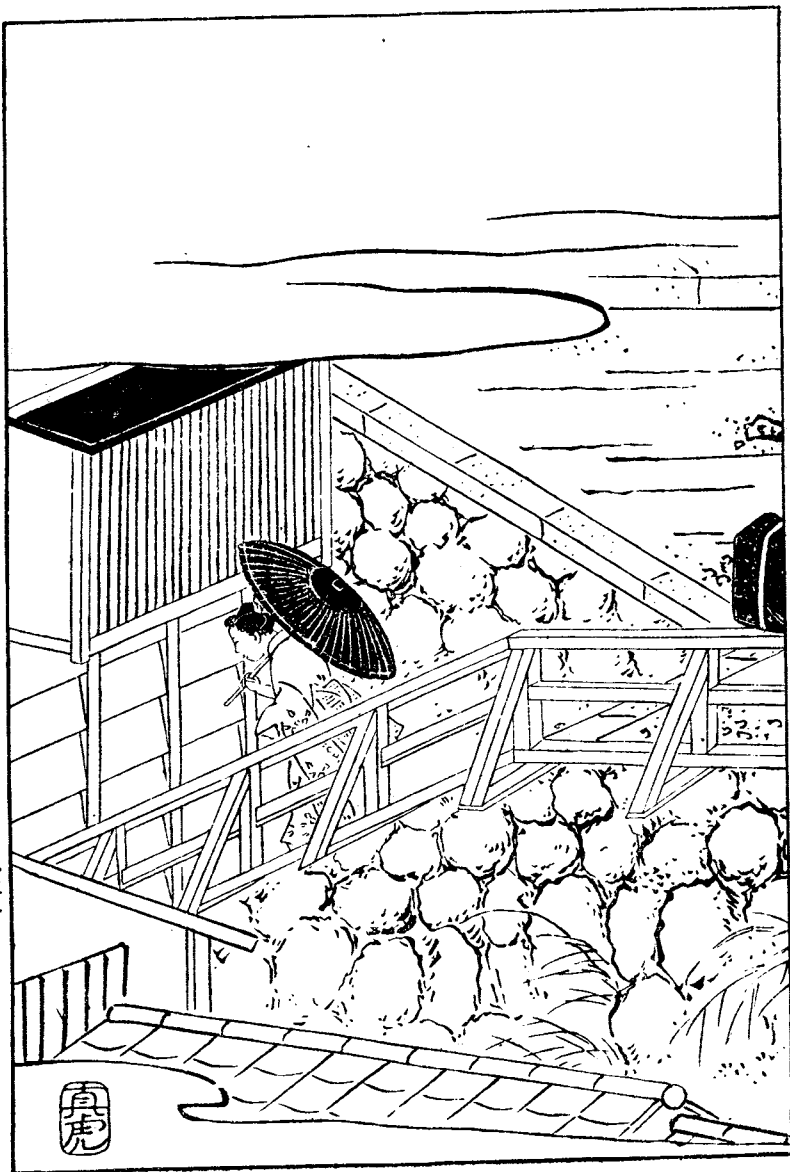


たんろをらやう
塔園揚
枝店



其二





不知遙夜蓬窓夢。

魂與二月明到幾州。

有浦風光何所有。

晚來唯見旅人船。

僧 仁 峯

定知吟得張公句。

猶聽鐘聲平夜天。

尼洲

〔割註〕一に二位の洲ともいふ。有の浦の沖の洲をいふ。

傳いふ壽永のむかし、長門壇浦にて二位尼安徳天皇を抱きたてまつり、海底に投ぜしに、その尸此洲

にたゞよひよりき。その穢を惡みて、其所の土を掘て捨しとぞ。今尼公の像神泉寺にあり。

圓城院

〔割註〕南町にあり。社僧なり。奥坊神納寺と稱す。開基いまだ詳ならず。天和年中は仁和寺

の末派に屬せり。中ごろ當寺の住侶歌をこのみければ、そのゆかりを以て玄旨法師投宿せられき。そ

の事次にあげたるによりて知るべし。本尊千手觀音。

九州道の記にはく、やどりける處はおくの坊といひける。こよひの魂まつりの手向などかまへ

おかれけるに、またほとゝぎすのふた聲三こそなけるを、こゝにはいつもかやうにあるかとたづ

ねしに、めづらしきことなりといふ。一首をよみてつかはしける。

しでの山こえてやきつる時鳥たまゝつるよの空になくなり

玄 旨 法 印

道成山無量壽院神泉寺

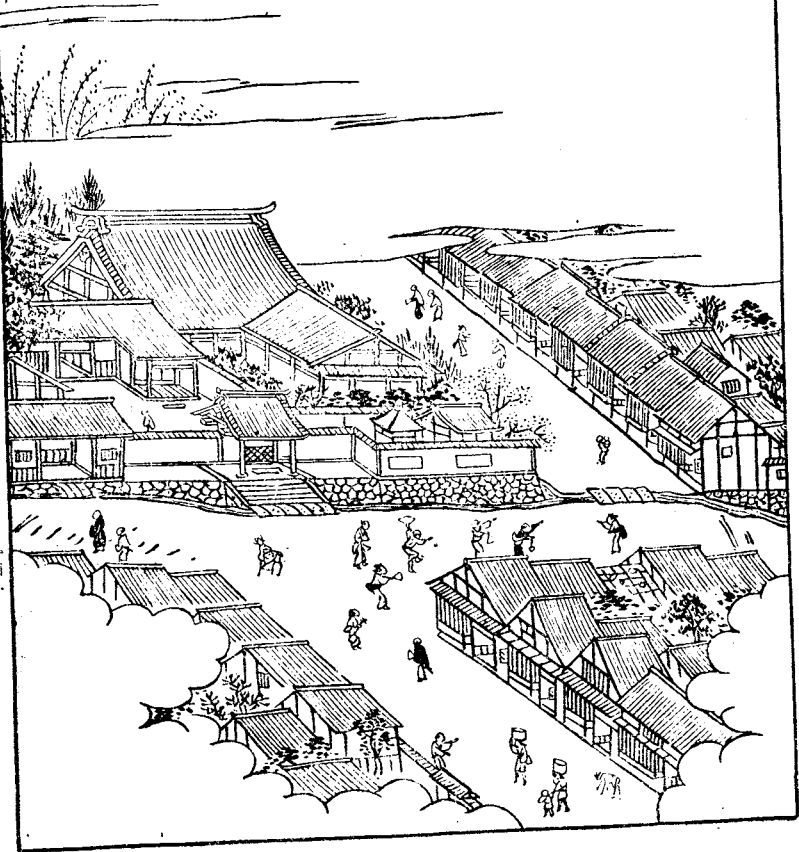
〔割註〕淨土宗なり、晝夜更漏を報ずるを以て、俗に時寺といふ。南町に

あり。

本尊阿彌陀 〔割註〕座像御長三尺、定朝の作。 臈仕不動 〔割註〕御長三尺、弘法大師の作。

毘沙門 〔割註〕御長不動におなじ。智證大師の作。 中將 姫像 二位法尼像 〔割註〕ともに堂内に

寶泉院 ほうせんいん

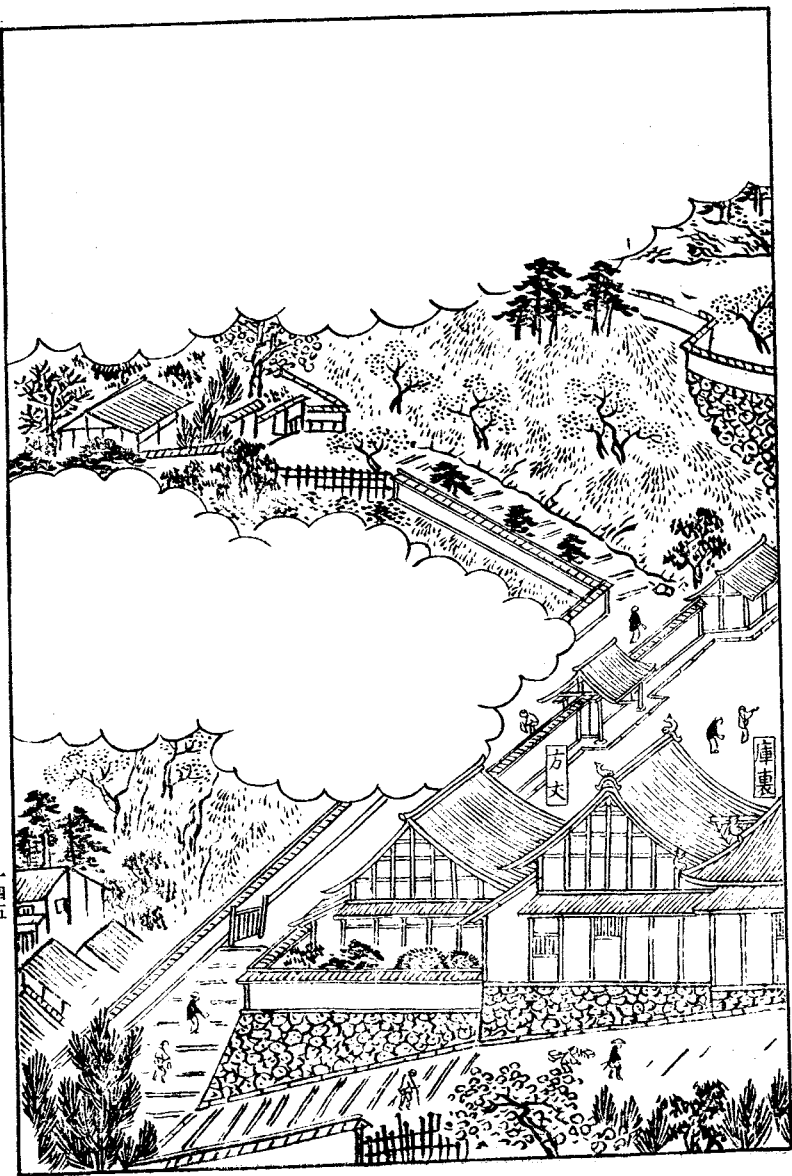


圓城院
神泉寺



神泉
 鐘舊
 景殊
 新日
 日真
 遊不
 厭頻
 試倚
 層軒
 窈窕
 眠三
 千世
 界一
 微塵
 寺田
 臨川





二位法尼肖像

尼公八平相國

清盛の室

建禮門院の

母公

安徳帝の外

祖母あり神

泉寺に其像

を安置も縁

故ハ本文ニ詳

なり

長九寸七分幅七寸全身金泥
朱漆ラモツテコレヲ彩レリ



安置せり。」護摩堂。

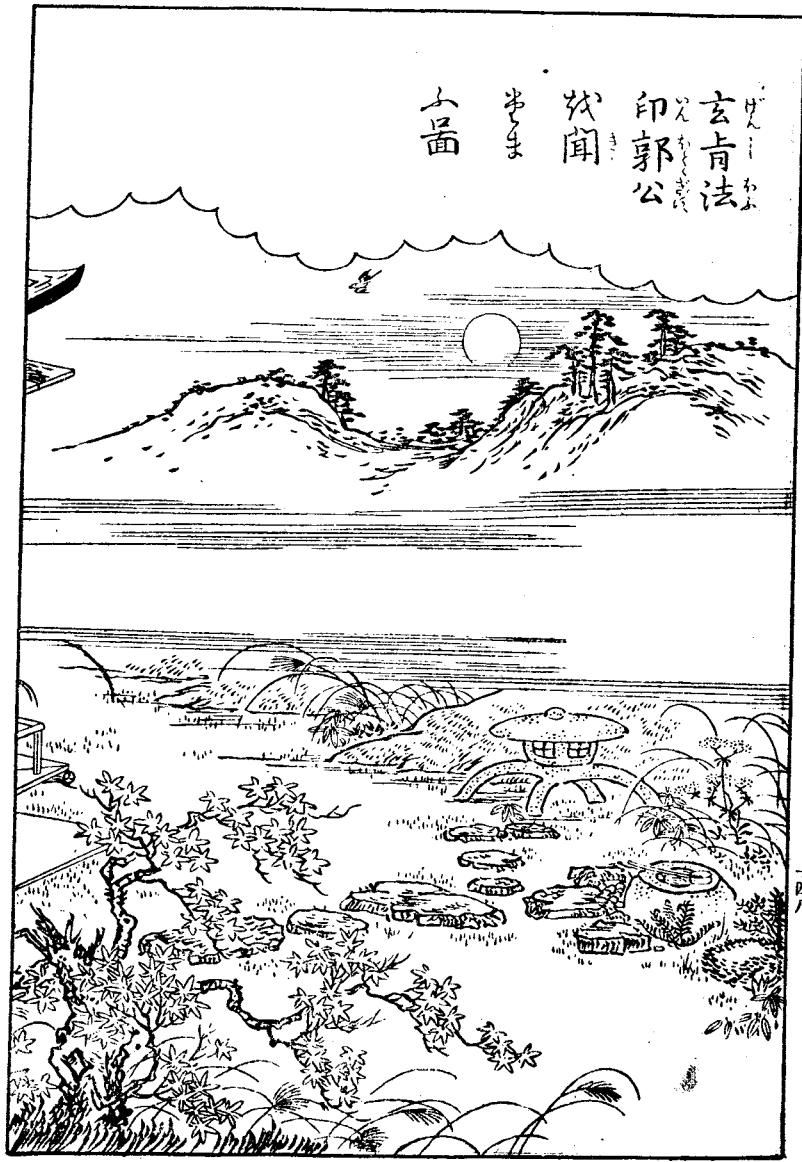
當寺開基は祐光上人なり。但し開基の年月を詳にせず。房蘇記にはく、壽永のとし平家西海に淪没せし時、二位禪尼の尸有浦に漂ひ來りぬ。この故に阿彌陀堂を建一道場を開けりとあり。當寺一に阿彌陀寺とよぶ。二位法尼の像を安すれば、則ち壽永の建立なること明らけし。その原は宗旨天台なりしを、天文のころ堪阿上人中興して今の宗に改めたりといふ。

華降山以八寺光明院

〔割註〕神泉寺に隣れり。淨土宗京都智恩院の末寺。

本尊阿彌陀〔割註〕立像御長三尺、惠心僧都の作。開山以八上人像 經藏〔割註〕庭内にあり。一切藏經を納む。末寺四字〔割註〕以中庵、稱名庵、紫西庵および島の外緒方村に西念寺あり。當寺の開基を尋ぬるに、天文の頃以八袋中とて昆弟とも非凡の聖おはしき。弟の袋中は檀王法輪寺を再興して京都三條に住たまへり。〔割註〕袋中の行徳都名所圖會に著し。以八上人は繁華の地を厭ひ、當島に來り此寺を建つといふ。新著聞集に云く、藝州宮島の光明院の開山以八和尚奥州磐城の人なり。その母子の無きを憂て辨財天女に祈請して、桶に水を入れて頭に戴き、足を翹て月影をうつし宿し、あらたに奇瑞を得て誕生したまふ。後に出家したまひて徳行いまそかりけり。加藤式部大輔どのは不信の人なりければ、いざその僧を試みんとて招請ありて、齋を設け家老二人相伴にして、その鑿應にことごとく魚鳥を料理し、艶色ある女子五六人、たゞ單の羅を着せて給仕に出し、ものゝ際よりうかゞひ見たまふに、和尚自若として暫く眼を閉たまひければ、料理せる魚鳥は忽に飛躍り、給仕せる女子はみすく骸骨となりぬ。大輔間のあたりの變相に、大におどろき恐れ、即座に改悔發心し

玄旨法
印郭公
然聞
半ま
小畠





帳のきぬ

あまのやき

かき

九十

たまへば、みなもとの如くになりし。和尚教化ねんごろにしたまひて、それより安藝の國へいらたまひ、この島に住居をしめらる。常に美麗なる女十餘人随仕しければ、誹謗をなしけるを聞たまひて、その女どもを法談の席へ呼出し、汝等ゆゑに他にそしりをなさしむること予がかなしみなり。急ぎこの所を立退くべしとありしかば、海上にはかに波浪おこりて暴風すさまじかりければ、聽聞の人々こはいかにと肝をひやす所に、さしも嬌艶なりし容忽に蛇形となりて、黒雲とゞもに海底にぞ入りける。誠に天女の十五童子をつかはして給仕せしめたまふ事この時はじめて知りしとかや。その後一千日の別時念佛を脩したまふ。八百日も過ぎぬるころ、島の社人たれかれ數人に一樣の夢のさとしありて、残るところの二百日は社内にてつとむべきよし、示現あらたに兩度までにおよびしかば、この上はとて、かの別時念佛を社内に入つしてつとめらる。また百五十日ほどへて和尚靈夢の告ありて、われこの回向の日にあたり、往生すとのたまひしかば、そのよし遠近に聞え、道俗いく千萬となくあつまりき。さて日中になりしかば、群集の者に高らかに十念を授けて往生をとけたまひけり。紫雲西方より靈變、天華降り妙香匂ひ微妙なる事どもおほかりしかば、老少隨喜の涙ほしあへず、御骨を拾ひとりて結縁せんと待かけたるに、俄に潮みなぎり來りて一點の餘灰もなく、みな海中に流れ入りしとなん。實に龍神の供養せしことよとおぼえていと尊とし、云々。これよりさきに、或人上人に肖像を畫いて讃をもとめければ

きえねたゞおもかけもうきこの世には残さじと思ふ水くきの跡

かくよみてかへしたまひぬ。上人の遷化は、實に慶長十九年九月十四日の事なり。今も正月十九日に

は、上人の月忌始として詣る人おほし。

什寶

光明院の額（青蓮院の宮尊澄法親王御筆）

六字名號

（圓光大師の筆）

同名號

（惠心僧都の筆）

引證彌陀經

（圓光大師筆）

稱聲彌陀經（中將姫筆）

地藏尊畫像

（弘法大師筆）

圓光大師畫像（自筆）

彌陀畫像五幅

（弘法大師筆）

般若心經

（覺鑊上人筆）

一遍上人畫像（上人目筆）○此餘數多かれども省きぬ

谷原

紅葉谷の右手をのぼりて平曠の原あり。常に麋鹿群をなせり。木々の梢のみみちするところは、また一しほのけしきをそへて、秋色實に愛すべきところなり。

谷原麋鹿（八景の一）

なく鹿のこゑは秋なるやつが原をかべの松はときはながらに

風早實積

夕されば鹿の音寒しやつが原あさちいろづく秋のあらしに

宜阿

傳道原頭物色幽

清風爽氣不_レ因_レ秋

菅原爲範

數株松樹陰森處

旦暮只看麋鹿遊

以八上人
說法之圖





豐草茂林地自幽。

引群仙鹿足優遊。

僧獨麟

慣看來客能相狎。

不識狐裘弦矢憂。

谷藥師堂

(同所にあり)

中間谷

(中間町にあり)

鳥居松岡

〔割註〕同所の上にあり。松二木ならび立て鳥居のごとし、よつて名づく。

この邊より大佛原へこゆる山路すべて櫻木の林なるゆゑに、彌生の頃は花さきにほひて、韻人驢客歸ることを忘れしむる處なり。

人鷹社

(中間谷にあり)

中間藥師堂

(同所のおくにあり)

道祖神社

〔割註〕幸町にあり。一に牛王ともいふ。〔祭神〕猿田彦大神。

陰陽石

〔割註〕同社の後にあり、俗に道祖神の神體なりといふ。

北藥師堂

〔割註〕藥師町にあり、正月十二日此堂において藥師講を行ふ。

寶光院

〔割註〕藥師町にあり社僧寺なり。天和年中仁和寺の末派に屬せり。開基詳らかならず。

本尊十一面觀音

〔割註〕御長二尺一寸、弘法大師の作。

脇士不動毘沙門

〔割註〕各御長一尺二寸。

龍上山西方寺寶壽院

〔割註〕同所のふくにあり。眞言宗京都仁和寺の派。

本尊阿彌陀（座像御長一尺五寸）

脇士觀音勢至（各立像、御長一尺二寸）

歡喜天堂（境内にあり）

鎮守金毘羅社

當寺の開基詳なることを得ず。文安年中宥順上人の中興なり。そも、當寺に安置し奉る本尊の由縁を尋ぬるに、往古この浦に螢火にあらでよなく、光を放つものあり。來往の人々かつおどろき且怪しみ、漁父に命じてこれを網せしむるに、豈はからんや大聖彌陀の尊像にてぞおはしましける。島人はいふもさらなり、遠近の老少つたへ聞て尊信渴仰の輩いとおほし。時に諸國斗數の比丘ありけるが、この靈應に感じつゝ身を抛て諸人を勸進し、遂に一字を建立す。尋て文安のころ、高野の學侶宥順上人辱なくも天奏を経て堂宇を再建し、まさしく本尊は龍刹よりたてまつるといふ由を以て、山を龍上と號し寺を寶壽とぞ稱しける。かゝりしよりこのかた、信心崇敬の輩たゆることなく、於今靈應また炳然たり。

什寶

不動尊一幅（弘法大師の筆）

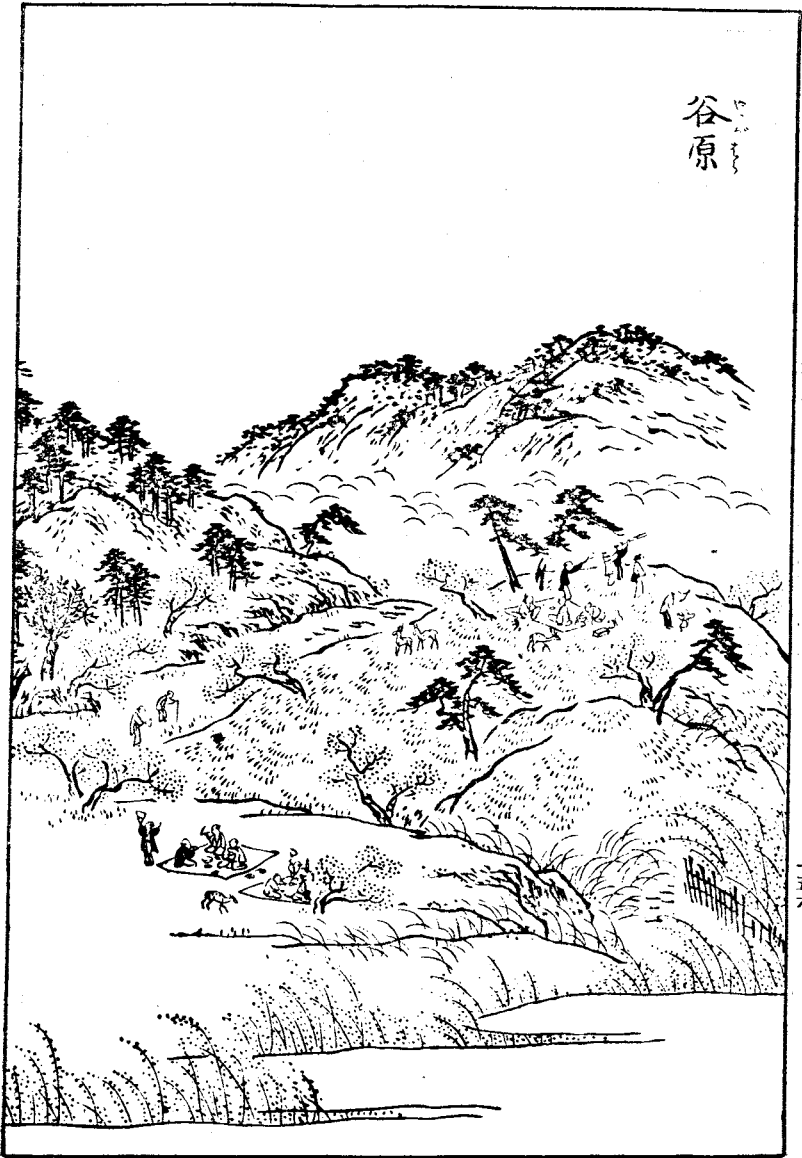
三尊阿彌陀（惠心僧都の筆）

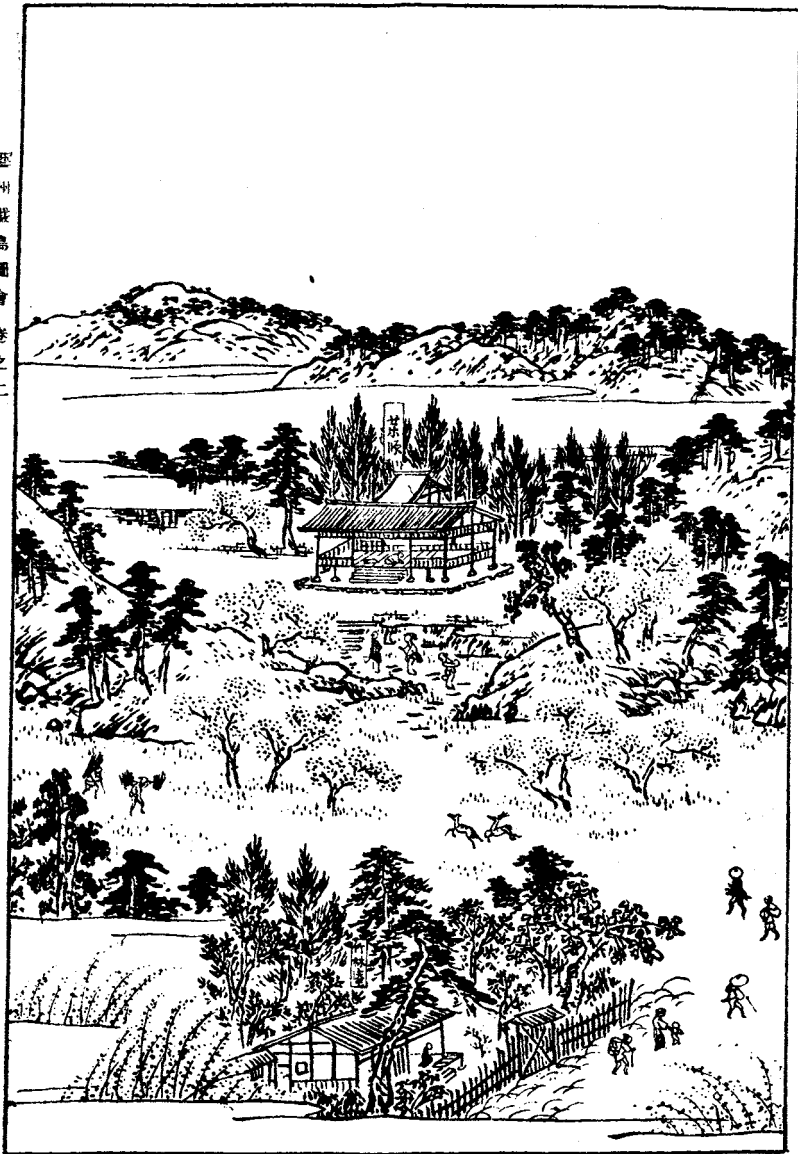
唐畫五大尊一幅

觀音畫像一幅（林宮寺の宮光子内親王の御筆）

唐畫藥師〔割註〕明の嘉靖中聖烈仁明帝畫工に命じてゑがゝしめたまへる物なるを、豊臣太閤

谷原





谷原麋鹿

やうきうのひろく

殿邑
安守

波あゝ

いろやま松

のそ秋

なな

つまゝ麻の

きこ林

うらむ松



兩餘豐草滿原
 春水綠沙明境
 自真麋鹿知無
 羅網患啣々不
 敢避遊人

寺田
 館川



晴川隱居
 法華
 畫

征韓の時傳來し、故ありて當寺に寄附し給へりとぞ。」

福壽院

〔割註〕大悲山と號す、寶壽院の抱地なり。」

廢愛染院

〔割註〕寶壽院の境内にありて新日山頂峯寺といふ。久しく廢して今その本尊愛染明王は寶

壽院にをさめたり。」

神力寺

〔割註〕西蓮町の上にある。」本尊不動(御長二尺二寸)

大御堂

〔割註〕同所にあり、俗に大佛といふ。この御堂は本社ほんじやの良よしにあり、鬼門きもんの鎮護ちんごといへり。

毎年正月十五日供僧の修正會あり。」

本尊阿彌陀(御長一丈六尺) 脇士不動毘沙門

この邊も大佛の原と稱して、地漸く廣く花木多し。彌生のころは甯歌の遊客、花顏雪肌の者を率ひきりて春色しゅんしよくをもてあそぶ多かり。

廢龍翔寺跡

〔割註〕西蓮町の上の山にあり。京師紫野大燈國師の建立にして輪奐りんげんたる堂舎だうしやなりしに、

いつの頃よりか退轉たいてんして、いま礎石のみそのおもかげを殘せり。」

新町

〔割註〕東町の内にして娼妓の廓くわくなり。もとは廣島の市中しちゆうにありしを寛永のころ此處ここに移さるとい

ふ。」

摺鉢谷

〔割註〕新町の後にあり、大木の櫻多し。毎年正月元日のあした御神前しんぜんへ新衣しんえを奉たてまつるに、新製

の諸蓋もろがさにのせて奉たてまつれり。この諸蓋といふもの、櫻木もて製つくること古式こしきなり。故ゆゑに島内しまうちの櫻木漸おだく大なるものは、間々まゝこれを伐きることあり。然しかるにこのところは青樓せいろうのうしろにて、情死じやうじの者ものあるをもてこの機はかりをいみて斧きねをいれず、木々きぎみな老大らうだいなり。」

存光寺

〔割註〕存光寺町にあり。禪宗ぜんじゆう佐伯郡さへきぐん廿日市にっかち洞雲寺どううんじ派はなり。」

本尊阿彌陀ほんそんあみだ（立像御長三尺）

臨土觀音りんどくわんおん勢せい至し（立像、各御長二尺五分）

當寺たうじは和州多武わしゅうたふぶの峯淨土院みねじゆつどんいん存光和尚そんくわうしやうの開基かいきにして、中興ちゆうきゆうは玄的げんてき和尚しやうなり。

濱役所

〔割註〕濱の町中小浦まなこにあり。屬吏ぞくじ分番ぶんぱんの舍せなり。」

町會所

〔割註〕同所にあり。」

粉場

〔割註〕濱の役所に隣りんれり。」

宮尾城墟

〔割註〕有ありの浦北うらきたの尾おをいふ。一いつに要害やうがいの鼻はなともいへり。毛利氏まうりし陶全妻たうぜんさいと合戦がっせんの時とき、城しろをこの

所に築つかれしより要害やうがいの名なはありとぞ。」

陰徳いんとく太平記たいへいき曰い、毛利元就まうりもとすけは隆元たかもと、元春もとはる、隆景たかかげ父子ふし四人よににんひそかに相議あひぎせられけるは、陶入道たうにちゆうだうさだめてちかきうちに義長よしながの後兄こうけいとして當國たうごくへ攻入せうにんべし。渠防長かみさだなが豊筑ゆほうちくの勢せいを引率ひんそつせば定て大軍たいぐんにてぞあるべき。かくては平場ひらばの合戦がっせん其利そのりを得んこと覺束かくしゆくなし。吾熟われじやく思案しあんをめぐらすに、いつくしまに城しろを築つき敵てきを呼引よびよなば、陶我たうが謀まに陥おちて彼島かのしまへわたり城しろを攻落せめおとし、それより仁保にほの島しまの城しろを攻せめとらば、草津櫻尾くさつさくらおの

中間谷
なままたま





香居松
とみまつ



小波
 山さくら
 はなさくら
 の
 花きなんも
 花子たりのねる



城は攻めざるにおつべしと工夫して、河魚の香餌に附くが如く、うか／＼と渡海すべし。入道かゝる行
 をこのむこと、己が勇に誇り軍術の危きを忘れ、急に勝利を得んとする癖より起れり。渠勇なりとい
 へども、慮淺くして人を侮れり。是欺くに易き所なれば、死地に陥れて一時がほどに勝負を決す
 べきなり。彼しまに城を築くこと敵を方便の第一たるべしと、評定一決して。天文二十四年五月下
 旬におし渡りて鉄初し、陳々々々の經營夜を以て日に繼げり。さて讐敵追討のためにとて、明神へ金
 銀珠玉の奉幣千捧ばかり山の如くに積上げる。其外大聖院の良政僧都、上卿、祝、棚守、大願寺宮
 僧、社人に至るまで祿給はりければ、みなく大によるこびて、この良將の武運天にかなひ、長久
 にして讐敵大内家の者どもたちまち討亡したまへと、社人は神前に於て神樂の鼓、鈴の聲に祝の詞を
 盡し、供僧は彌山に登りて護摩の烟に丹心のまことを顯はして、求聞持をぞおこなひける。實や誠は
 天の道神明感應の理にや有けん。おなじき六月はからずも敵の船大野口へ來りぬ。嚴島に在合せた
 る警固船浦兵部丞、飯田七郎右衛門等を先として、思ひよらざるをりなれば敵船こそかゝり來たり
 たれ、船漕いませ碇引上げよと囁めきけり。尋常の兵どもなりせば、唯今の有様にては假令取合せ
 馳向ふとも、忽ち利を失ふべかりしを、何も水戰に馴たる勇士なれば、漁父いまだ鉤を抛げざれど
 も、金鱗波をよせ來ると喜びいさんで漕向ひ、散々に攻戰ふところに、敵も纒かに三艘にて來れるほ
 どの死生不知の勇卒なれば、身命を惜まず防戦す、されども御方これを事ともせず、飯田七郎右衛

門、敵の宗徒の兵桑原掃部介を討とりければ、敵大に機を失ひ何處ともなく逃行けり。元就去年折敷島にて既に合戦におよばんとする期に至りて、石田六郎左衛門當島より御久米卷敷捧げ來りしに依て合戦利を得たり。今また當島に城を築て、はからざるに敵來り、桑原以下を討得たること、是疑ふところもなく、當島の明神敵に打勝吉瑞を示したまへるなりとよるこび、即ち頸ども城のふもとにかけならべけり。かくて城の地尾續の方をば、人夫千人のちからを合せて深く掘り切り、城郭要害の利、軍法の秘術をつくされけるほどに、餘所目には淺間なる小城にて地の利また堅固ならず、片手に掛て抛るともたやすかるべき様にみゆれども、敵ちかく攻寄る時は壁立萬仞に、碧海ふもとを繞りければ、容易におつべき様ぞなかりける。普請功積りて成就せしかば、己斐豊後守、同五郎兵衛、新里掃部介を大將として、垣田、伊藤、片岡に吉川元春の手の者佐伯源左衛門、樋口彦兵衛、福原左近將監が郎等福原刑部大輔等を先として、究竟の兵三百餘人さし籠らる。壘たかく溝深きのみかは、また勇將猛卒なれば防州勢何百萬にて攻るとも、輒く落べしとは見えざりけり。

今伊勢神社「割註」要害の鼻にあり。拜殿、鳥居、瑞垣あり。例祭十一月朔日。」

毛利家より米二十五石を附られて、毎年湯立の神事を行はる。これ陶全姜の躰をしづめられんが爲なりとぞ。

北藥師
稱名庵



寶光院
ひょうこういん



院 珠 宝

藝州縣島圖會卷之二

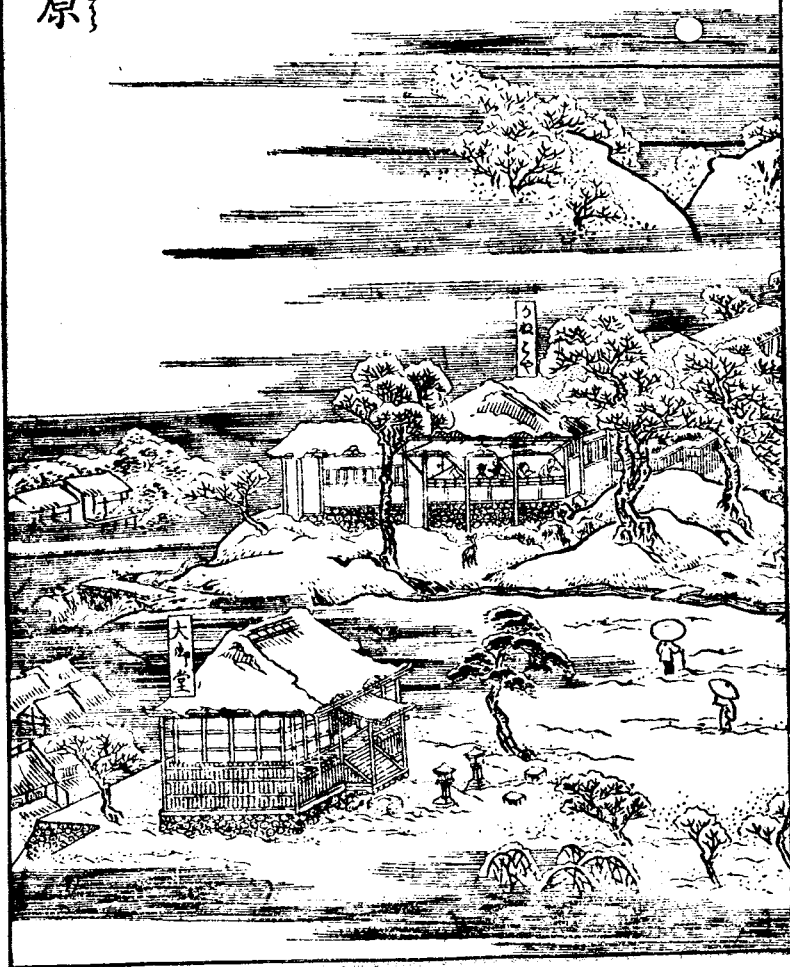


福壽院
ふくじゆいん





お不
やけのす
大佛原



休堂〔割註〕長濱小浦へこゆる山路にあり。貧賤の旅人の一宿の爲に設けたり。

二王門〔割註〕同所にあり、往昔本宮の二王門なりといへれど其證なし。延寶六年ふたゝび創立す。

この邊も櫻樹多し。

小浦〔割註〕多くは漁家なり。寛政のころかよ、此浦にじよるといへる孝女ありけるが、五歳の時よ

り父母に仕へ、朝暮の勤誠をつくせり。此事官に聞えければ、銀若干を賜ひて賞せられき。そのと

しじよる五十歳餘なりけるとぞ。其外魚屋町のやす中西町助六が妻も、孝を以て賞せらる。皆同じ比

ほひとぞ聞えし。

池浦〔割註〕小浦につゞきたり。此處花木多し。舟中より望ていとよし。

蛭子社〔割註〕小浦にあり。

角佛堂〔割註〕小浦の後にあり。役小角を安置せり。

搖岩〔割註〕長濱みち仁王門の邊にあり。大さ方二間ばかり。

西行返〔割註〕仁王門より長濱へかよふ路角佛のあたり、池の浦の山路をいふ。むかし西行法師此處

にて姫に逢ひ、山路を尋ねしに、いらへもせざりしかば

うつせみのもぬけのからにことゝへば山路をさへもをしへざりけり

これを聞て^き、姫うちをみて、もぬけのからかところよむべけれ、^た既にもぬけのからなれば、なにかはをしへまゐらすべきといへり。西行答ふるに^{こた}言葉なくしてかへりぬ。よりて此處をかくなづけしとぞ。

新町

去んまぢ
 今いまの世よ此こゝ花はな女をんなのひかりの夜よ祭まつり
 なりなりむららのはな女をんなのいまのまつり

子こなりなりその倭やまと
 名な鈔しやう乞ぎ盜たう類るい

遊あそ女ぶ楊やう氏し漢かん

語ことば鈔しやう云いふ遊あそ行ゆ女をんな

児こ 和名宇加花女
又云阿曾比

一云いひ亘わた遊あそ行ゆ謂いふ

之の遊あそ女ぶ侍まじ夜よ而して祭まつり

其その淫いん令しやう者もの謂いふ之の夜よ

祭まつり 今按夜祭俗
云夜祭知

るるおおてて知しべべここ中ちゆう

古ふるよりよりハハそのその花はな女をんなのちゆう中ちゆう

ハハ白しろ拍ぱく子しといいふふ一いっ種しゆ也なり



きて男舞をまふ今

の舞子まいこの似にたるものもの

て下学集げがくしゅう小白拍子歌せうはくしうか

舞而銜まいりてくわ賣女うりめ色いろ之の者もの也

とあるこれちりされば花女

と白拍子はくはくしとい共とも小籠せうらうを以もつて

うくれありくものなる故ゆゑ後のち

皇みかど拍はくしの帝ていハ水みづ无な瀬せ殿どのまめ

一ひとひひ一ひとここととひひくく度たいといふいお

をを一ひとははその外ほかの法はふ代だいももゆ

松まつの状じやうりくハはありたるたるることこともも阿

りてり當時そのときの記き録ろくともとも不ふ見みををたり

かまかままくくももかかここ紀き宸しん儀ぎのみのみあり

ままささかかくく道ちやうつつたたよよれれるるものものななれれハハ公こう

殿どの上人じやうじんいいづづれれこれこれをを知しててぬぬらんらん中ちゆうのの

城しろをを傾かたむけけ園えんををかかととららるる艶えん色しきななき



子もあはれ思ふけの能を
 蒙りて幸ひを取出したるひもたか
 けき夜発へ拉女小やうかちりては
 淫奔を發する才かりなる故また
 とひ花を猪之月を妬む
 美姿あつてもいとつらよ
 地下の塵まのころつれ
 て漢雲の交りをゆる
 せねまこれまよつて記録
 ともの中まびさく載
 たることえあさくば志
 うふあれいかまもこれも
 もと同類きて倭名鈔
 小乞盗のたぐひもたまは
 賤者なることいふも更
 なりかくて今の拉女薙

右
橋園也



こ
 子いもとうり 貴人の前か
 出ろそ能いせたく市井
 のか年のもてあまげも
 めまれいといふ昔あうも
 たよりたんととどぢ
 の思ひなきひちかぢ
 既に昇平二百年奢
 修きまねる世の中
 をれは益座のか菊
 びよ利き小田屋のまぢ
 へは唇をかきうて紫衣紅
 夢のうけいさけいさちるはねの
 全盛も所を譲ん容貌
 一度らう小嫌者たれん身を
 備わらんあまきりもは廊下介
 く足をとむることをなれ



今伊勢社
存光寺

載酒瓜皮趁
晚潮小紅十
五坐吹蕭存
光寺畔佳風
月練說曾遊
魂已消。

管聊庵

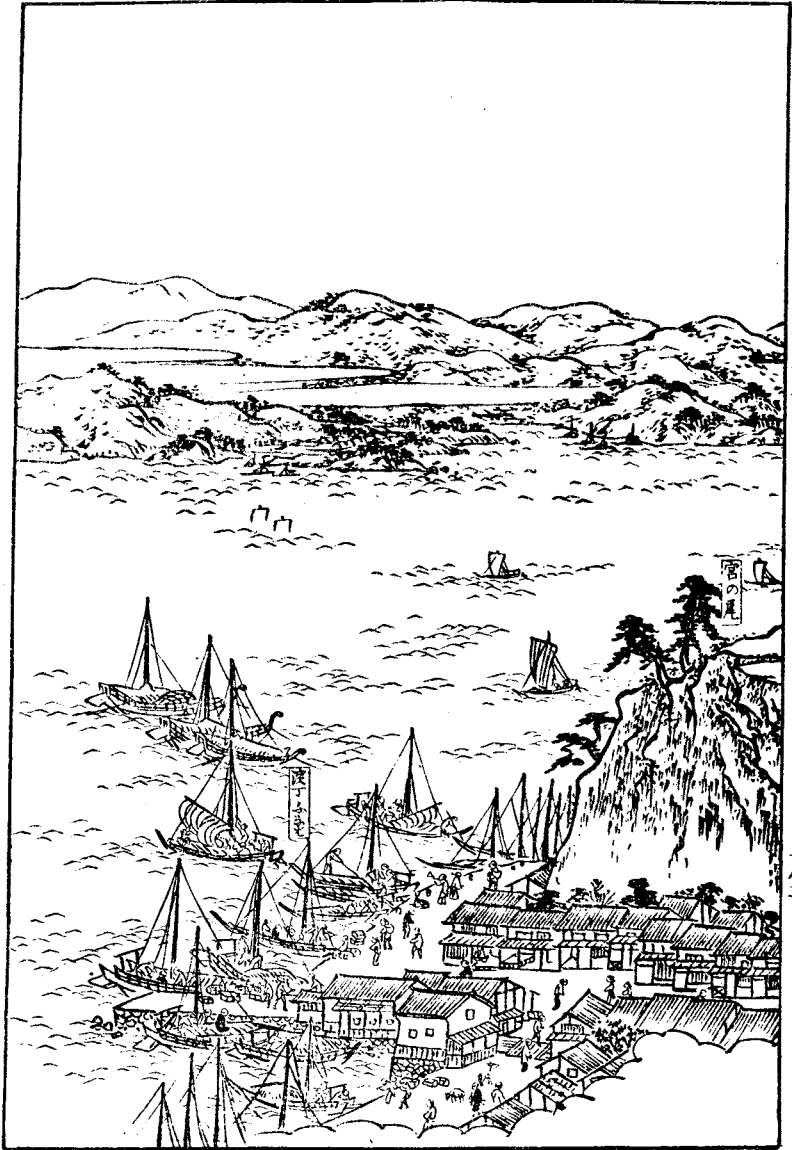
遊存光寺

僧在榮

靈場知幾寺傑出一禪
林賴有法中主釋縱物
外心山呈清淨相海泰
度生音千戶肆野裏枯
囊神所歎







○按に、香川氏の秋長夜話に云、此事西行撰集抄にもみえず、本朝語園によるに、西行奥州松島に趣き、七日あまりに名所二百ばかりもめぐり。興つきて、これよりほかにしかりぬべき名所、いかほどあるぞと里人に問ふ。いま十日ばかりにして見盡さるべしといふ。西行退屈して是よりかへれり。其處を西行戻といふといへり。此事を附會せるにやといへれど、今いふところ久しく島につたはりたれば、かくしるしつ。

毎歲十一月朔日今伊勢
御湯立の神事ハ
存光寺も内ま
打てあれな
行ふあり





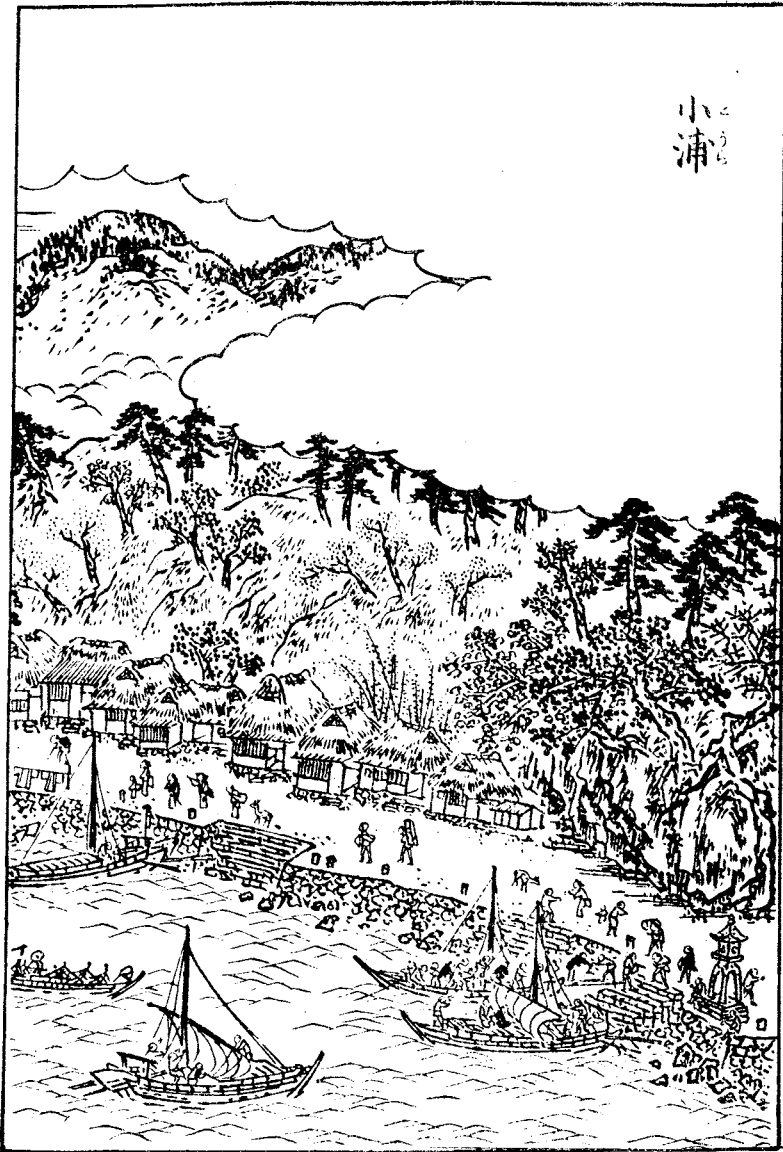
官尾の城合戦

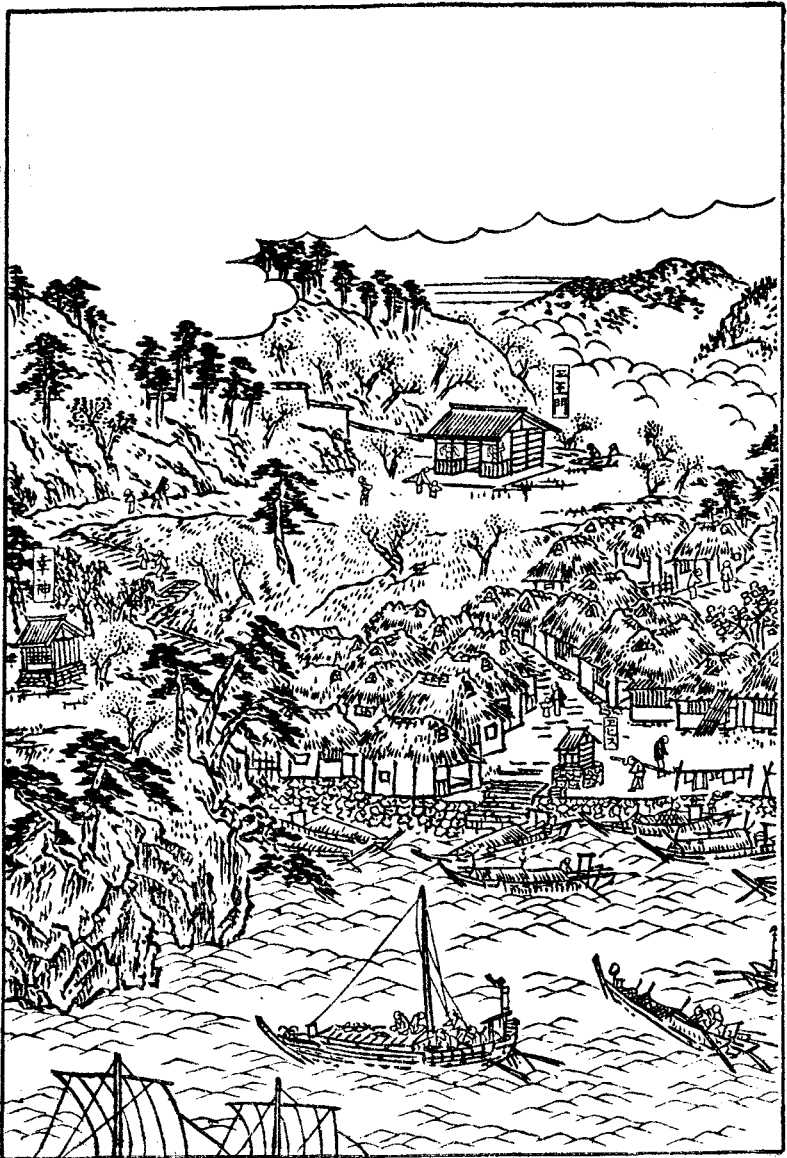


官尾の城ハ今の存光寺
 今伊勢の所なりと云ふ
 郭内ニ即今の地勢也
 以考ふる時ハいふも淺回
 る岩墨を主とともかも
 へられども諸軍記にあり
 経官時月と貴一趣に
 も見え且陶氏大軍を
 以て攻寄せしことな
 彼此と思ハ魏然たる
 一城郭なり
 昔官今時の形
 樹を以画面を
 議をること
 なれ



小浦こうら





嚴島圖會卷之二終